

マルカム3世によるイングランド侵攻

The Invasion to England by Malcolm III. King of Scotland

川瀬 進

分野：経済史：スコットランド経済史 332.332

キーワード：バスク、DNA、アルバ王国、スコウシア王国、タニストリー=システム (Tanistry System：長子継承ではなく、王(族長)在任中、傍系親族による王(族長)後継者選定制度)、オークニー諸島、イーングボーグ (オークニー伯トルフィンの娘：(Ingibiorg: Ingebiorg (daughter of Thorfinn of Orkney, 1030- 1067))、オマージュ (Homage：封建の主従関係、臣従礼)、フェダリズム (Feudalism：封建制度)、ウィタン、ウィテナジモット (Witan：Witenagemot：アングロ=サクソン賢人評議会)

- I. はじめに
- II. アルバ、スコウシア、スコットランド形成
- III. 王位継承
- IV. イングランド侵攻
- V. おわりに

I. はじめに

スコットランド経済史上、最大な関心事項は、アルバ王が現在のスコットランド領土を、法的に画定させたことである。

その領土を画定させたのは、スコット族出身で、アルピン王家 (the Alpin) の最後の後継者であり、990年頃ストラスクライド王国 (Kingdom of Strathclyde) のストラスクライド王であり¹、1005年頃アルバ王国 (現スコットランド) のアルバ王 (the King of Alb) であり、1018年以降スコウシア王国 (King of Scotia) のスコウシア王であったマルカム2世 (Malcolm II, King of Scotia, c.954-1034.11.25：スコウシア王在位 1018-1034) である。

マルカム2世は、古代から続いたケルト社会、血縁関係を重視する氏族制度を引き継ぎ、スコウシア王国と統治しようとした。

すなわち、マルカム2世は、自身の国政を安定させるために、血縁関係者に、それ相応の経済力と軍事力を備えて貰わなくてはならなかった。

マルカム2世は、結婚により、3人の娘をもうけた。

3人の内、2人は明確に、史料に記録されていたが、1人は不明であったので、便宜上、以下のようにした²。

長女：ベソック (Bethoc, 984-1045) : アサル大領主 (head of the house of Atholl) で、1000年頃、ダンケルド修道院長であるクリナン (Crinan : Crínán, Abbot of Dunkeld, c. 976-1045) と結婚した妻で、スコウシア王ダンカン1世 (Duncan I, King of Scotia, 1001-1040.8.14 : 在位 1034-1040) の母。

2女：ドウナダ (Donada, c. 985-1034.11.25) : マリー大領主フィンレック (Findláech: Findleach: Finlay, Mormaer of Moray: Earl of Moray : 在位 c. 990-1020) の妻で、スコウシア王マクベス (Macbeth, King of Scotia, 1005-1057.8.15 : マリー大領主在位 1032-1057 : スコウシア王在位 1040-1057) の母。

3女：ノルウェー王国オークニー伯シーガード (Sigurd, Earl of Orkney, c. 960-1014.4.23 : 在位 991-1014) の妻で、オークニー伯トルフィン=シグルソン (Thorfinn Sigurdsson, the Mighty, Earl of Orkney, c. 1009-1058) の母。

マルカム2世は、長女ベソックの息子ダンカン (後のスコウシア王ダンカン1世) に、当時アルバ王国と同盟国であったストラスクライド王国のブリトン王オーウェン (Owen the Bald, King of Strathclyde, d. 1018) が、後継者なく、1018年に死去した時、祖母系の血縁により、カンブリア王、すなわちストラスクライド王を継承させた³。

この時点でアルバ王国は、スコット族、ピクト族、アングル族 (1018年カーハム戦での併合)、ブリトン族の連合王国となり、国名がスコウシア王国 (Kingdom of Scotia) になった⁴。

つまり、この1018年のカーハムの戦い後、アルバ王マルカム2世は、スコウシア王になり、皇太子のダンカンが、ストラスクライド王ダンカン1世となったのである。

言い換えると、マルカム2世は、従来からの慣習であったタニストリー=システム (Tanistry System : 長子継承ではなく、王 (族長) 在任中、傍系親族によ

る王（族長）後継者選定制度⁵を無視し、スコウシア王にダンカン1世を指名したのである。

その後、マルカム2世は、1034年11月25日、アルパ王国内、アンガス州（Angus）で、自身の下臣により襲われ、グラームズ城（Glamis Castle）の狩猟小屋（Hunting Lodge）で亡くなった⁶。

マルカム2世の死後、スコウシア王国を継承したのは、長女ベソックの長男ダンカン1世である。

その後、ダンカン1世を殺害し、スコウシア王に就いたのは、マルカム2世の2女ドウナダの子供マクベス（Macbeth, :後のスコウシア王 King of Scotia, 1005-1057.8.15 : 在位 1040-1057）である。

マクベス王は、ダンカン1世の長男マルカム（Malcolm :後のスコットランド王マルカム3世（Malcolm III, King of Scotland : マルカム=カンモア（“偉大な族長”） Malcolm Cammore or “Great Head”, 1031.3.16-1093.11.13 : 在位 : 1058-1093）⁷によって殺された。

マクベスの後、スコウシア王国を継承したのは、マクベスの義理の息子ルーラッハ（Lulach, the Simple, King of Scotia, c.1032-1058.3.17）であり、ルーラッハも、ダンカン1世の長男マルカム（後のマルカム3世）によって殺害された。

その後、スコウシア王国を継承したのは、1057年マクベス殺害し、1058年ルーラッハをも殺害したダンカン1世の長男マルカム（後のスコットランド王マルカム3世）である。

ダンカン1世の息子マルカムは、1058年にスコウシア王国を継承し、スコットランド王マルカム3世（Malcolm III, King of Scotland, マルカム=カンモア Malcolm Cammore）に就いた。

マルカム2世以降、ダンカン1世、マクベス、ルーラッハは、彼らの治世上、王位継承が最大の関心事項であり、近隣領土の拡大に貢献しなかった。領土が拡大されなかったということは、アルパ王国、スコウシア王国に、安定した経済的基盤を築く地代としての増収が見込まれないということの意味する。

逆に領土が縮小されると、増収ではなく、軍事力低下をもたらし、存亡の危機を招くことになる。

3王（ダンカン1世、マクベス、ルーラッハ）は、一定の領土を継続したということであって、スコットランド経済史上、一定の評価はできるが、経済発展という意味では、やや物足りなかった。

だが、マルカム3世は、法的に画定させた領土、国境が画定されていないボーダー地方の領土を、少しでもスコットランド王国の領土に組み入れようとして、5回ほど軍を南下させ、イングランド北部に侵攻した。

でも、この侵攻は、失敗に終わった。

そこで本稿では、このマルカム3世のイングランド北部侵攻が、スコットランド経済史どのような意義があるのか、アルバ王国、スコウシア王国、スコットランド王国の時系列と共に、考察する。

II. アルバ、スコウシア、スコットランド形成

アルバ王国（現スコットランド）のアルバ王（the King of Alba）、そしてスコウシア王国のスコウシア王（the King of Scotia）、さらにアルピン王家（the Alpin）の最後の後継者であるマルカム2世（Malcolm II, King of Alba, King of Scotia, c.954-1034.11.25：アルバ王 1005.3.25-1018：スコウシア王 1018-1034）は、自身の王位としての地位を確保・安定させるために、直系の子孫に王位を継承させる政策を施行した。

この政策を実現させるために、マルカム2世は、アルピン王家独特の慣習であったタニストリー=システムを、強制的に廃止させた。

なお、タニストリー=システム廃止を、実現させるために、マルカム2世は、この政策に反対する者を、次から次へと手段を択ばず、殺害していった。

具体的には、997年のコンスタンティン4世（Constantine IV：在位 995-997）、1005年のケネス3世（Kenneth III：在位 997-1005）の殺害である。

自身の野望を実現させるために、非道な殺害という手段を選んだマルカム2世は、後世の経済史家から、ザ＝デストロイヤー破壊王（ゲール語で **Forrnach = the destroyer**）⁸ と言うニックネームを付けられた。

マルカム2世は、自身の王領地を確保・安定させるために、まず初めに、長女ベソックを、アサル大領主で、ダンケルド修道院長であるクリナンと結婚させた。

この結婚により、マルカム2世は、経済基盤である王領地を、確実に安定化させ、また、後のスコットランド王国の首都・エディンバラ（**Edinburgh**）を含む耕作地ローランド（**the Lowland**）を、安定的に支配することができた。

次に、アルバ王国北部を、ヴァイキングから守るために、2女ドウナダを、マリー大領主フィンレックと結婚させた。

この結婚により、マルカム2世は、ローランドの北部と不毛な地ハイランド（**the Highland**）を、支配下に置くことができた。

さらに、ヴァイキングからの脅威を取り除くために、3女を、ノルウェー王国オークニー伯シーガードと結婚させた。

この結婚により、マルカム2世は、オークニー諸島からのヴァイキングと、良好な関係を維持することができ、マリー伯領の平穏を確約することができた。

これらの結婚は、いずれも、マルカム2世にとって、自身の身や王位を守るための政略結婚であった。

そして、マルカム2世は、経済基盤を拡大させるため、言い換えると領土拡大のため、ヴァイキングで、デンマーク出身のイングランド王クヌート1世（**Cnut : Canute : Knut I, 995-1035.11.12** : イングランド王在位 1016-1035 : デンマーク王在位 1018-1035 : ノルウェー王在位 1028-1035）統治下のイングランド領バーニシア（**Bernicia**）に侵攻した。

このバーニシア侵攻は、1018年のカーハムの戦い（**the Battle of Carham**）となった。

マルカム2世が侵攻できた最大の要因は、イングランド北部の軍事力が手薄になっていたことと、アルバ王国と同盟国であるストラスクライド王国のブリ

トン王オーウェン（Owen the Bald, King of Strathclyde, d. 1018）の軍事的支援があったからである⁹。

クヌート1世は、イングランド王国内に、ヴァイキングたちが、絶え間なく押し寄せて来ていたため、それに対処していた。

結果的にマルカム2世は、1016年、手薄となっていたアングル族の住むイングランド領バーニシアの穀倉地帯ロシアン（Lothian：後のスコットランド王国の首都・エディンバラ（Edinburgh）を含む地）や、1018年、ブリトン族の住むボーダー地域（the Borders）を含むストラスクライド王国を吸収合併することができたのであった。

この1018年時点でアルバ王国のマルカム2世は、スコット族、ピクト族、アングル族、ブリトン族の族長、すなわち連合王国の国王となった。そこで、マルカム2世は、アルピン王家のスコット族出身なので、1018年以降、王国名をスコウシア王国（Kingdom of Scotia）とし、その土地をスコットランド（Scotland）とした。

Ⅲ. 王位継承

マルカム2世は、前アルバ王ケネス3世（Kenneth III, 967-1005：在位997-1005）からの王位継承者を断絶させるため、タニストリー=システムを廃止し、強制的にアサル大領主で、ダンケルド修道院長であるクリナンと結婚した長女ベソックの長男ダンカンに、同年1018年、ストラスクライド王国の王位を継承させ、さらに強引に後のスコウシア王に指名した。

この指名により、その後、確実にスコウシア王位を継承したダンカン1世は、継承時から不評な王となった¹⁰。

このタニストリー=システムを廃止したことも、マルカム2世が、後世の経済史家たちにより破壊王と言われる所以の1つである。

なお、ストラスクライド王ダンカンは、1030年に、デイン人のノーサンブリア伯シアード（Siward, Earl of Northumbria, ?- 1055：在位1041-1055）の妹シビル（Sybilla：Suthen, Sibylla）と結婚し、1031年に、マルカム

(Malcolm：後のスコットランド王マルカム3世 (Malcolm III, King of Scotland：マルカム=カンモア (“偉大な族長”) Malcolm Cammore or “Great Head”, 1031.3.16-1093.11.13：在位：1058-1093) をもうけた¹¹。

穀倉地帯ロシアン (現エディンバラを含む地) が、1016年にアルバ王国領、すなわちアルバ王国領に入ることによって、アルバ王国とイングランド王国との新しい国境が確定された。

この新しい国境が、現在のスコットランドとイングランドとのボーダー地方の境界線である。

この新境界線が画定されたことで、アルバ王国の最大領土拡大 (現在のスコットランド領域) が決定的となった。

このことは、当然、少なくともアルバ王国内、後のスコウシア王国内の経済基盤がしっかりとし、税収が増加するということを意味している。税収が増えるということは、スコウシア王国内が安定し、軍事力が強化されるということをも意味する。

マルカム2世による領土拡大、新境界線の法的確定は、スコウシア王国内の経済的増収、言い換えるとスコットランド経済史上、特筆されるべき最重要な事項であった。

その後、マルカム2世は、スコウシア王国内に侵攻してくるイングランド軍に、耐え切れなくなっていた。

その当時のイングランド王は、デンマーク王で、ノルウェー王でもあったクヌート1世 (Knut I：Cnut：Canute, 995-1035.11.12：イングランド王在位 1016-1035：デンマーク王在位 1018-1035：ノルウェー王在位 1028-1035) である。

イングランド王クヌート1世は、ヴァイキングの血を引き、巨大な海軍力をもって、スコウシア王国の東岸、ボーダー地域から北上し、略奪を繰り返し、侵攻して来た。

これに対し、スコウシア王国のマルカム2世は、手の打ちどころがなかった。

結果的に、マルカム2世は、クヌート1世に対し、1033年、封建的主従関係であるオマージュ（Homage：封建的主従関係、臣従礼）を執らざるを得なくなり、スコウシア王国が、イングランド王国の下位国にならざるを得なくなったのである¹²。

言い換えるとマルカム2世は、クヌート1世に対し、封建的主従関係オマージュ（臣従礼）を執る代わりに、スコウシア王国の独立と安全を買ったのである。

この封建的主従関係オマージュ（臣従礼）を、マルカム2世は、独立したスコウシア王国（後のスコットランド王国）にとって、存亡的危機状態とは、考えていなかったようである。

マルカム2世にとって、スコウシア王国外からやってくる危機的状態よりも、国内の危機的状態の方を、より重いと考えていたからである。

というのは、マルカム2世にとって、クヌート1世による危機的状態とは、スコウシア王国の存亡であり、独立した国内の危機的状態とは、ケルト的社会・血縁関係を重視する氏族社会による身の危険・生死に関することであったからである。

イングランド王国の属国になったスコウシア王国を安定させ後、マルカム2世は、タニストリー=システム廃止に反対する自身の下臣である族長に、1034年11月25日、アンガス州、グラームズ城（Glamis Castle）で襲撃され、城内の狩猟用屋敷（Royal Hunting Lodge）で亡くなった¹³。

マルカム2世の死去によりスコウシア王国の王位を継承したのは、予定通り、マルカム2世の長女ベソックと、アサル大領主でダンケルド大修道院長であるクリナンとの長男・ストラスクライド王のダンカン1世である。

スコウシア王としてのダンカン1世のアジェンダ（Agenda：政策課題）は、第1に、オークニー諸島から南下してくるヴァイキングからの略奪、第2に、ボーダー地域におけるイングランドからの侵攻に対処することであった。

具体的には、ヴァイキングの侵略の危険に晒されている北部マリー（Moray）地域の軍事強化や、イングランドとの領土紛争の危機に晒されている南部ボーダー地域での軍事強化であった。

特に、スコウシア王国北部、従弟のマリー大領主マクベス（Macbeth, Mormaer of Moray、在位 1032-1057: その後のスコウシア王マクベス、Kingdom of Scotia 在位 1040-1057）が、ヴァイキングで、従弟のノルウェー王国オークニー伯領トルフィン=シグルッソン（Thorfinn Sigurdsson, the Mighty, Earl of Orkney, c. 1009-1058）と戦っている、防衛紛争、略奪阻止問題が、最重要課題であった¹⁴。

ダンカン1世にとって、ノルウェー王国オークニー伯領トルフィン=シグルッソンを始めとするヴァイキングに対する危機感は、イングランド王国が、エゼルレッド2世（Æthelred II : Ethelred II, “the Unready 無思慮王”， ‘the Redeless 無計画王’， 968-1016.4.23 : 在位 978-1013, 1014-1016）治世時、自身の2男エドマンド=アイアンサイド（Edmund II, ‘Ironsides 剛勇王’， c.988-1016.11.30 : 在位 1016.4.23-1016.11.30）と権力闘争をしている1016年に、デンマーク王国のヴァイキングを指揮していたクヌート（後のイングランド王クヌート1世：デンマーク王：ノルウェー王）によって征服されてしまったことによっても、十分に認識していたはずである。

エゼルレッド2世は、体調不良により、1016年4月23日に亡くなり、その後、イングランド王に成ったエドマンド=アイアンサイドは、デイン人クヌートとの戦い、1016年10月18日、エセックス南東でのアッシングダムの戦い（Battle of Ashingdon : アッサンダンの戦い Battle of Assandune）に敗れ、その和平条約後、1016年11月30日に亡くなった¹⁵。

和平条約の条文ごとく、クヌートが、当時の慣習法として、王位継承権決定機関、すなわちアングロ=サクソン賢人評議会であるウィタン（Witan）、あるいはウィテナジモット（Witenagemot）により選出されイングランド王クヌート1世になった¹⁶。

なお、武力でもって、1016年イングランド王に就いたクヌート1世は、ローマ時代ロンドンニウム（Londinium : London）と称せられた沼沢地、すなわちテムズ川河畔の戦略上の要衝であった所、ロンドン（現在の City of London シティ=オヴ=ロンドン）で、要塞を兼ねた宮殿を建造し、国政を行うことにした。

イングランド王に就いたデイン人のクヌート1世は、この1016年に、自身の地位確保のために、イングランド王位の上位継承権を保持しているエドモンド=アイアンサイドの長男エドモンド=アシリング（Edmund Ætheling, c. 1015-c. 1053）と、生まれて数カ月の2男エドワード=アシリング（Edward Ætheling : エドワード=ジ=エグザイル Edward the Exile, 1016.4.23-1057.4.10）を、イングランドから追放し、殺害することを決定した。

その殺害を実行するために、クヌート1世は、彼らをイングランドから、自身の異父兄弟の兄であるスウェーデン王オロフ=スコットコング（Olof Skötkonung, King of Sweden, c. 980-1022）の宮廷に送り、そして彼らの命を絶つための刺客を送った。

スウェーデンの地に着いた幼いエドモンドとエドワードは、この時点から、クヌート1世の命を受けた刺客から、命を狙われることになった。

このことに対して、幼いエドモンドとエドワードは、刺客から身を隠し、当時キリスト教化の推進国であったハンガリー王国の敬虔なイシュトヴァーン1世（István : 後の Saint István I : Saint Stephen I, c. 969-1038.8.15 : ハンガリー王 975?-1038）に、助けを求めた。

少年時代の12年間を、スウェーデンの地で過ごしたエドモンドとエドワードは、秘密裏に助けられ、1028年、オロフ王の娘インゲゲルド（Ingegerd Olofsdotter, 1001-1050.2.10）の嫁ぎ先キエフのヤロスラフ1世（Yaroslav I : ヤロスラフ=ザ=ワイズ Yaroslav the Wise of Kiev, c. 978-1054.2.20 : 在位 1019-1054）の王宮へ逃れた。

このキエフの地において、イングランド王位の上位継承権を有しているエドモンドとエドワードは、ヤロスラフ1世に保護され、青年時代を過ごした。

この時、青年の2男エドワード=アシリング(エドワード=ジ=エグザイル)は、1035年に、キエフのヤロスラフ1世の娘アガサ(Agatha of Kiev, ?-c. 1093)と結婚した。

敬虔なキリスト教徒であったハンガリー王ステファン1世が、1038年8月15日に亡くなったものの、エドモンドとエドワード(+妻アガサ)は、刺客から逃れるため、1046年に、インゲゲルド王妃の娘キエフのアナスタシア(Anastasia of Kiev, c. 1023-1074)の嫁ぎ先ハンガリーのアンドリュウ、言い換えるとインゲゲルドの義理の息子アンドリュウ(後のハンガリー王アンドリュウ1世 Andrew I of Hungary, c. 1015-1060.12.6: 在位 1046-1060)の許に亡命した。

そのキリスト教徒であるアンドリュウは、成人のエドモンドとエドワード(+妻アガサ)が、クヌート1世の命を受けた刺客から襲われないように、彼らの随行者として、キエフから自身の故郷ハンガリーまで付き添った¹⁷。その返礼として、エドモンドとエドワードは、アンドリュウの王位奪取に加担し、彼を、アンドリュウ1世にした。

そして、ハンガリーに亡命したエドワード=アシリング(エドワード=ジ=エグザイル)とアガサの間に、ハンガリー南部、レカ城(Castle Reka: Castle Réka)にて、アングロ=サクソン人の長女マーガレット(Margaret: 後の聖マーガレット Saint Margaret of Scotland, c. 1046-1093.11.16)が生まれた¹⁸。

この長女マーガレット(後の聖マーガレット)は、ハンガリー王アンドリュウ1世の宮殿において、王族、王女としての高度な教養を身に付けるようになった。

具体的には、多数の語学(ラテン語、フランス語)、政治経済学、キリスト教学、宮廷でのセレモニー、ファッション、立ち振る舞いの所作である。

この内、大陸の政治経済学で、大陸的なフェダリズム(Feudalism: 封建制度)を、一般教養の座学として学んだ。

この大陸的なフェダリズムとは、国王を頂点として、国王が王国の全土地を所有し、家臣は、国王の平時・危機的状況時に、国王に軍役奉仕を行うという

条件で、各自その国王の土地を保有させてもらっていた、という国家組織である。

また、家臣は、臣下に同じ条件で、土地を保有させていた。

さらにまた、臣下は、多数の家臣と1対1の双務契約 (bilateral contract : bilateral agreement) の関係を結ぶことができた。言い換えると臣下は、複数の家臣に仕えること (複数従臣制) ができたということである。

王国内の土地全ては、国王1人が所有しているのであって、それ以外の何人も、土地を所有することができなかった。

すなわち、ここで1つ気を付けなければならないことがある。

それは、大陸フェダリズムの特徴である1対1の双務契約を有するフェダリズムである。「国王の家臣は下臣であり」、「家臣の臣下は下臣である」。だが、「臣下は国王の下臣ではない」、ということである。

具体的には、国王に、何か危機が迫ったら、家臣は、国王に対し軍役奉仕のため、駆け付けなければならないが、臣下は、駆け付けなくてもよいということである。

この大陸のフェダリズム (封建制度) は、後の結婚相手、スコットランド王マルカム3世の政策に多大な影響を与えた¹⁹。

なお、この2人の間に後に、2女クリスティーナ (Cristina, daughter of Edward the Exile, c. 1047- c. 1100)、長男エドガー=ジ=アシリング (Edgar the Ætheling, c. 1051-c. 1126 : 在位 1066.10.15-1066.12.10) も、誕生した。

イングランドでは、イングランド王クヌート1世が1016年11月30日に誕生し、そのクヌート1世が自身の地位を確実なものにしている間、スコウシア王国では、イングランドからの侵攻よりも、ヴァイキングからの略奪の方が、最重要課題であった。

言い換えると、スコウシア王国にとってヴァイキングに対する対応策は、スコウシア王国の存亡にも関わる最重要課題であった。

当然、当時の喫緊の問題は、オークニー諸島から、南下してくるヴァイキングの略奪である。

スコットランド経済史を研究する上で、ヴァイキングの軍事的拠点であるオークニー諸島を考察することは、不可欠である。それは、スコットランドの存亡を左右する要因を孕んでいたからである。

ヴァイキングにとっても、オークニー諸島は、スコウシア王国を侵略、略奪するうえで、軍事的に重要な拠点であった。

スコウシア王国にとって、オークニー諸島からのヴァイキングの侵略、略奪の軍事的脅威の経緯は、以下の通りである。

アルバ王ドナルド2世 (Donald II, ? - 900 : 在位 889-900) 治世時当初、オークニー (Orkney)、シェトランド (Shetland)、ヘブリディーズ (Hebrides)、ケイスネス (Caithness) の各島々は、アルバ王国領有の地であった。

だが、890年頃、アルバ王国へのヴァイキングの来襲、略奪、植民化が激化し、これらの島々、アルバ王国の北端が、ハーラル1世 (Harald I : ハーラル美髪王 Harald Fairhair, c. 850-c. 932 : 在位 872-930) のノルウェー王国の1部になってしまった²⁰。

このことにより、ノルウェー王ハーラル1世と、アルバ王国マリー大領主 (Mormaer of Moray) との間に最大限の緊張感が生じた。

ヴァイキングの来襲は、イングランドにおいても激化し、イングランド王エドマンド1世 (Edmund I, 922-946.5.26 : 在位 938-946.5.26) は、945年に、莫大な戦費がかかり、利益を生まないカンブリア (Cambria) を、封建制度的主従関係オマージュ (Homage : 臣従礼) を執ることを条件に、アルバ王マルカム1世 (Malcolm I, c. 900-954 : 在位 943-954) に宗主権を譲渡した²¹。

マルカム1世治世時、およびケネス2世 (Kenneth II, ?- 995 : 在位 971-995) 治世時当初、アルバ王国の領土を、多少拡大させたものの²²、ケネス2世治世時の987年に、アルバ王国は、ノルウェーのヴァイキング・シーガード (後のノルウェー王国領オークニー伯シーガード Sigurd, Earl of Orkney, c. 960-1014.4.23 : 在位 c. 991-1014) に、オークニー諸島を拠点とし、マリー伯領 (Mormaer of Moray) の奥まで侵攻され、サザランド (Sutherland) 、ロス (Ross) 、マリー伯領の1部を略奪されてしまった²³。

この略奪が、アルバ王国にとって最大の存亡の機であった。

このノルウェー王国領オークニー伯シーガードの脅威を取り除くために、アルバ王マルカム2世は、1008年に、自身の3女を政略結婚させた²⁴。

この政略結婚により、オークニー伯領と、アルバ王国北部マリー伯領との軍事的緊張が、緩和された。

すなわち、この3女の政略結婚によって、アルバ王国は、存亡の機を脱したのである。

なお、デイン人ヴァイキングのアルバ王国西部地区略奪に対しては、マルカム2世は、1010年以降、軍事強化を行うことによって、アバディンシャーのモートラック (Mortlach) で、ヴァイキングを撃破することができた。

また、当時ボーダー地域においては、イングランド軍の軍事力が手薄になっていた。

というのは、イングランド王がクヌート1世になってから、クヌート1世が、イングランド内のヴァイキング・デイン人 (the Danes) の来襲に対処していたためである。

このようにアルバ王国の王は、オークニー諸島からのヴァイキングの脅威に対し、彼らと武力で闘うと共に、自身の娘を政略結婚させることにより、その脅威を取り除き、アルバ王国を存続させなければならなかった。また、元々、デンマーク出身のヴァイキングであったイングランド王クヌート1世であってさえも、デイン人のヴァイキングに手を焼いた。

このクヌート1世が、イングランド国内のヴァイキングに手を焼いている間、イングランド軍の軍事力が手薄になったエディンバラ (Edinburgh) を含むボーダー地域南部の穀倉地帯のロシアン (Lothian) は、半独立を保つことができていた。

この半独立を保っていたロシアンを、アルバ王マルカム2世が侵略したため、イングランドとの戦い、すなわち1018年のカーハムの戦い (the Battle of Carham) となり、アルバ軍が勝利し、アルバ王国が、イングランド領ノーサンプリア (Northumbria) から、ロシアンを、吸収合併することができた²⁵。

この時点でのアルバ王国は、国情が安定し、軍事力が強化され、勢力が拡大していた。

だが、マルカム2世が、1020年に、2女ドーナダの夫・マリー大領主フィンレック（Findláech: Finlay, Mormaer of Moray：在位 c. 990-1020）を殺害した時から、王位継承に問題が生じ始めた。

また、マリー大領主フィンレックの息子マクベス伯が、ケネス3世（Kenneth III, 967-1005：在位 997-1005）の孫娘であり、マリー伯ギル＝コメガイン（Gille Coemgáin: Gillacomean: GillaCoemgáin, Mormaer of Moray：在位 1029-1032）の未亡人グロッチ（Gruoch, Queen of Alba, c.1020-1054）と、1033年に結婚した時から、王位継承に更なる問題が、表面化し出した。

というのは、マクベス伯が、王位継承権の主張を強め始めたからである。

マルカム2世が自身の下臣によって、1034年に殺害されたのち、順調に公的に、マルカム2世の息子ダンカン1世が、スコウシア王位を継承した。

ダンカン1世は、従弟のマクベスが王位を狙っていることを、脳裏に入れながら、オークニー諸島から南下するヴァイキングの脅威・危機感、ボーダー地域におけるロシアンの重要性に対する政策を打ち出さなければならなかった。

これらのことを十分に考慮したうえで、スコウシア王ダンカン1世は、度々ヴァイキングやイングランドに交戦を挑んだが、いずれも失敗し、多数の下臣や多額の戦費を失ってしまった。

具体的には、1039年に、ダンカン1世が、イングランド王クヌート1世の領地、ノーサンブリア伯領の北部の要衝ダラム（Durham）に、遠征し、失敗したことである²⁶。

このことは当然、王国民の有力な下臣や貴族たちからの不満を増殖させていった。

この不満は、特に祖父がマルカム2世で、母がダンカン1世の母の妹で、自身がダンカン1世の4歳年下の従弟であり、王位継承を主張しているマリー大領主マクベス伯にとって、無視することのできないことであった。

というのは、マクベス伯が、祖父のマルカム2世が、アルピン王家の慣習であったタニストリー=システムを完全に無視し、強引に王位継承者に、ダンカン1世を指名したことからであり、また4歳年下の自分自身には、スコウシア王国の王位が、巡ってこないことを悟ったからでもある。

そこで、このマクベス伯の無視できない不満は、やがてダンカン1世への反感、反乱へと変わっていった。

ダンカン1世は、スコウシア王国安泰のため、反感を持っている従弟のマリー一大領主マクベス伯を従え、1040年、エルギン(Elgin)近郊のバーグヘッド(Burghead)にて、従弟のノルウェー王国オークニー伯トルフィン=シングルッソン(Thorfinn Sigurdsson, the Mighty, Earl of Orkney, c. 1009-1058)との戦いに挑んだ時であった。

この時、マクベス伯は、自身の野望のため、従兄のダンカン1世を裏切り²⁷、従弟のトルフィン=シングルッソン伯と同盟、より詳しく言うと軍事同盟を結んだのである。

そのバーグヘッドの戦いの結果、ダンカン1世は、マクベス伯とトルフィン=シングルッソン伯の連合軍に敗れ²⁸、1040年8月14日、エルギン郊外のボスゴワン(Bothgowan: 現ピッグベニーPitgaveny)で捕らえられ、そこの鍛冶屋の小屋(a blacksmith's forge)で、マクベス伯の下臣により殺害された²⁹。

ダンカン1世を殺害したことにより、マクベス伯が、スコウシア王国を継承し、1040年、スコウシア王マクベス(King of Scotia)になった。

この直後、身の危険を感じたダンカン1世の皇太子マルカム(マルカム=カンモア: 9歳)は、母シビル(Sybilla: Suthen)、弟ドナルド(Donald: 後のスコットランド王ドナルド3世 Donald III, 1033-1097)と共に、選択の余地なく、スコウシア王国からイングランド王国領に脱出した。

言い換えると、マルカム(マルカム=カンモア)は、母シビルの兄であり、自身にとって伯父であるデイン人のノーサンブリア伯シアード(Siward, Earl of Northumbria, ?- 1055: 在位 1041-1055)のもとに行き、亡命生活を送らざるを得なくなったのである³⁰。

当然、この亡命先からマルカム（マルカム=カンモア）は、スコウシア王マクベスに対し、父の復讐と、スコウシア王の王位剥奪を狙うようになった。

その後、12歳のマルカム（マルカム=カンモア）は、1043年、ウェセックス王家（Kingdom of Wessex）出身で、イングランドのアングロ=サクソン王エドワード証聖王（Edward, the Confessor, c. 1004-1066.1.5：在位 1042-1066）³¹の宮廷に行き、彼の庇護のもとに育った³²。

すなわち、マクベス王に対して、復讐の念をもっていたマルカム（マルカム=カンモア）は、このサクソン王エドワード証聖王の宮廷で、スコウシア王国の王位継承者として、大陸的なフェダリズム（Feudalism：封建制度）を、実感として学ぶと共に、騎士道、語学（ラテン語、フランス語）、を身に付けて行った。

この大陸的なフェダリズムについて、12歳のマルカム（マルカム=カンモア）は、エドワード証聖王の宮廷にいる間、比較するものがないため、これが唯一の国家を安定させるための国家組織、経済政策、土地保有であると実感した。

この大陸的なフェダリズムは、エドワード=アシリグ（エドワード=ジ=エグザイル）の長女マーガレットが、亡命先ハンガリーで学んだ大陸的なフェダリズムと、同様な内容であった。

すなわち、この大陸的なフェダリズムとは、国王が王国の土地すべてを、所有しているということが大前提であり、そしてその国王の家臣は、国王の平時・危機的状態時に、国王に軍役奉仕を行わなければならないという条件付きで、各自土地を保有させてもらえる国家制度であった。

また、家臣は、同様に、同じ条件付きで、臣下に土地を保有させていた。

臣下は、多数の家臣と1対1の双務契約の関係を結ぶことができた。

王国内の全土地は、1人の国王が所有できるのであって、それ以外の何人も、土地を保有することができても、所有することができなかった。

ここで1つ気を付けなければならないことがある。

それは、大陸フェダリズムの特徴である1対1の双務契約を有するフェダリズムである。「国王の重鎮家臣は下臣であり」、「重鎮家臣の重要臣下は下臣である」。だが、「重要臣下は国王の下臣ではない」、ということである。

具体的には、国王に、何か危機が迫ったら、重鎮家臣は、国王に対し軍役奉仕のため、駆け付けなければならないが、重要臣下は、駆け付けなくてもよいということである。

ただし、重鎮家臣に何かあった時は、重要臣下は、軍役奉仕義務のため、駆け付けなければならない、ということである。

なお、ウェセックス王家のエドワード証聖王は、沼沢地上に建造されたクヌート1世の宮殿近くにウェストミンスター=パレス (Westminster Palace: ウェストミンスター宮殿: その跡地に現在の国会議事堂) を建造した。また、その近くに、エドガー王 (Edgar the Peaceful, c. 942-975.7.8: 在位 959-975) が、復興させたベネディクト派の修道院、ウェストミンスター=アベイ (Westminster Abbey: ウェストミンスター寺院) も建造した³³。

このウェセックス王家は、イングランド七王国時代から、デイン人の侵攻にも耐え生き延びた王国である。ゆえに、イングランド王に就く者は、ウェセックス王家の出身者となっていた。

このアングロ=サクソン王エドワード証聖王は、青年時代の大半を、母方フランスのノルマンディー (Normandy) で過ごしていたため、ノルマンディー様式的生活習慣が身につき、英語は喋れず、フランス語を話していた。そのため、自身の人脈および宮廷の重鎮たちは、フランス語が話せるフランス人で固めていた。このことに対して、以前からイングランドの宮廷に仕えていたアングロ=サクソンの貴族たちは、かなりの不満を持っていた。

ダンカン1世の父であり、マルカム (マルカム=カンモア) の祖父でもある、アサル大領主 (head of the house of Atholl) で、ダンケルド修道院長クリナン (Crinan: Crínán, Abbot of Dunkeld, c. 976-1045) は、1045年、孫のマルカム (マルカム=カンモア) を、スコウシア王国の王位に就かせようとして、蜂起し暴動を起こした。

だが、この蜂起は、クリナン修道院長が、マクベス王の軍により殺害され、失敗に終わった³⁴。

このクリナン修道院長の殺害によって、マクベス王は、1045年、クリナン家と関係の強かったデイン人のノーサンブリア伯シアワードから、攻撃を受けるようになった³⁵。

なお、ハンガリーで亡命中であったエドワード=アシリング（エドワード=ジ=エグザイル）とアガサの間に、1047年、2女クリスティーナが誕生した。

マクベス王は、1050年、ローマへの巡礼を行い、その巡礼地において、巡礼地で得た多量の貨幣を、畑に種をまくような感じでばら蒔き、貧しい人に施しを行っていた³⁶。

この時期、敬虔なマクベス王が、ローマ巡礼を行えたというのは、スコウシア王国が政治的にも経済的にも安定していたということが窺える。

また、この1050年の巡礼には、マクベス王が、敬虔なカトリック教徒であるが故に、ローマ教皇セント=レオ9世（St. Leo IX, 1002.6.21-1054.4.19：在位1049-1054）の教皇就任祝いに参列するためと、その聖レオ9世から、縁戚のダンカン1世、クリナン大修道院長の殺害を行ったことに対し、懺悔し、赦免を得るためであった。

なお、ハンガリーで亡命中であったエドワード=アシリング（エドワード=ジ=エグザイル）とアガサの間に、1051年、長男エドガー=ジ=アシリングが誕生した。

この1051年に、ノルマンディー公ギヨーム2世（Guillaume II, Duc de Normandie：後のイングランド王ウィリアム1世 William I：征服王 the Conqueror, 1027-1087.9.9：在位1066-1087）は、フランス語しか話せないサクソン王エドワード証聖王の下に、表敬訪問に行った。

この時1051年に、エドワード証聖王は、自身を慕ってフランスから遣って来たノルマンディー公ギヨーム2世に、次期王位を継承させるという王位譲渡の約束をした³⁷。

一方、弟エドワード=アシリング（エドワード=ジ=エグザイル）と同様にハンガリーに亡命中であった兄、エドモンド=アシリングが、ハンガリー王イシュトヴァーン1世の王女ヘドヴィグ（Hedwig of Hungry, 1010-?）と結婚した直後の1053年に、死亡してしまった。

この兄エドモンド=アシリングが、1053年に亡くなったことにより、ハンガリーで亡命生活を送っている弟のエドワード=アシリング（エドワード=ジ=エグザイル）が、イングランド王位継承権保持者として、最高の上位者となった。

なお、この1053年に、一時縁戚関係にあることを理由に反対されたものの、ローマ教皇ニコラウス2世の特許状により、ノルマンディー公ギヨーム2世は、フランダースのマティルダ（Matilda of Flanders, 1031-1083.11.2）と結婚した。

エドワード証聖王の宮廷で、順調に育っていたマルカム（マルカム=カンモア）は、23歳の時、エドワード証聖王の命を受けたノーサンブリア伯シアアワードの軍事支援を受け、1054年に、スコウシア王国に進撃し、マクベス王軍と、パース近郊のダンシネーン丘陵（Dunsinane Hill）で衝突した。

結果は、1054年7月27日、マルカム（マルカム=カンモア）が支援を要請したシーアワード軍が、多額の戦費を費やし軍力を増強したことにより、マクベス王軍に勝利した³⁸。

その勝利の立役者であるマルカム（マルカム=カンモア）の伯父、ノーサンブリア伯シアアワードが、1055年に亡くなった。その後、順調に、ノーサンブリア伯を継承したのは、有力なアングロ=サクソン貴族、ウェセックス伯ゴドウィン（Godwin, Earl of Wessex, 1001-1053.4.15：伯在位1020-1053）の3男トスティグ=ゴドウィンソン（Tostig Godwinson, son of Earl of Godwine, Earl of Northumbria, c. 1026-1066.9.25：ノーサンブリア伯1055-1065）である。

順調に伯位の継承が行われたことによって、マルカム（マルカム=カンモア）と、ノーサンブリア伯トスティグ=ゴドウィンソンとの関係は、良好で、両者は、友好同盟を結び、盟友となった³⁹。

ノーサンブリア伯トスティグ=ゴドウィンソンと、彼の兄、ウェセックス伯ゴドウィン2男ハロルド=ゴドウィンソン（Harold Godwinson,

1022-1066.10.14：後のイングランド王ハロルド2世 Harold II、在位 1066.1.6-1066.10.14) は、イングランド王位継承権保持者であった。

一方、イングランドでは、サクソン王エドワード証聖王が、50歳になり子供がなく、次期継承者を選ぶことが、早急に望まれていた。

そこで、サクソン王エドワード証聖王は、ハンガリーで亡命生活を送っているエドワード=アシリング (エドワード=ジ=エグザイル) の消息を知り、彼を次期王位継承者とするために、イングランドに呼び戻すことにした。

その呼び戻す大役を、サクソン王エドワード証聖王は、1054年4月、ウスター司教アルドレッド (Aldred: Ealdred, Bishop of Worcester, ? -1069.9.11: ウスター司教 1046-1062: ヨーク大司教 1061-1069) に指名した⁴⁰。

なお、その呼び戻す交渉人を、サクソン王エドワード証聖王は、自身の主要な閣僚で、有力なアングロ=サクソン貴族、ウェセックス伯ゴドウィン (Godwin, Earl of Wessex, 1001-1053.4.15: 伯在位 1020-1053) の2男ハロルド=ゴドウィンソン (Harold Godwinson, 1022-1066.10.14: 後のイングランド王ハロルド2世 Harold II、在位 1066.1.6-1066.10.14) に指名し、彼を、ハンガリーに向かわせた。

そして、イングランド王室では、エドワード証聖王の次期王位後継者として、1057年4月に、亡命中のハンガリーから、エドワード=アシリング (エドワード=ジ=エグザイル) および彼の家族 (妻アガサ (Agatha, wife of Edward the Exile, c. 1030-1070)、長女マーガレット (Margaret: 後の聖マーガレット Saint Margaret of Scotland, c. 1046-1093.11.16)、2女クリスティーナ (Cristina, daughter of Edward the Exile, c. 1047- c. 1100)、長男エドガー=ジ=アシリング (Edgar the Ætheling, c. 1051-c. 1126: 在位 1066.10.15-1066.12.10) が、無事、イングランドに帰って来て、一安心であった。

エドワード証聖王の宮廷で、長女マーガレット (後の聖マーガレット) は、ハンガリーで王女としての高度な教養を身に付けたうえ、さらにアングロ=サクソン方式の儀式や、キリスト教学 (ローマ=カトリック教) を学んだ。

また、長女マーガレット（後の聖マーガレット）は、ハンガリーで学んだフェダリズムを、更に、このエドワード証聖王の宮殿においても、実感として学んだ。

実感として学んだ大陸のフェダリズム（封建制度）とは、マルカム（マルカム=カンモア）がエドワード証聖王の宮廷で学んだ同じフェダリズムと同様の内容であり、大陸フェダリズムの特徴である1対1の双務契約を有するフェダリズムである。

なお、この1057年に、イングランドに到着したエドワード=アシリング（エドワード=ジ=エグザイル）は、イングランド到着後、数日たった1057年4月10日に亡くなってしまった⁴¹。

この時点で、アガサは、未亡人となった。

この1057年4月以降、エドワード証聖王の宮廷で、おそらく、マルカム（マルカム=カンモア（26歳））は、エドワード=アシリング（エドワード=ジ=エグザイル）の長女マーガレット（11歳）と出会っている⁴²。

一方、敗北を喫していたマクベス王は、身の危険を感じ、早急に、スコウシア王国の次期王位継承者を指名しなければならなくなった。

そこで、マクベス王は、グロッホとの結婚によって、子供が恵まれなかったので、自身の次の王位継承者に、グロッホと前夫・マリー伯ギル=コメガイン（Gille Coemgáin: Gillacomean: GillaCoemgáin, Mormaer of Moray : 在位1029-1032）との息子ルーラッハ（Lulach:後のスコウシア王ルーラッハ:Lulach, King of Scotia, Lulach mac Gille Coemgáin, simple(愚王), c. 1029-1058.3.17 : 在位1057-1058)、言い換えれば、マクベス王にとっては義理の息子ルーラッハを指名した。

マルカム（マルカム=カンモア）とシアーワード伯軍は、マクベス王に軍事的圧力を掛けながら、ついに1057年8月15日、アバディンシャー（Aberdeenshire）で、ランファナンの戦い（the Battle of Lumphanan）に挑んだ⁴³。

ランファナンの戦いで、マルカム（マルカム=カンモア）が、マクベス王を殺害し、勝利した。

その後、すぐに、マルカム（マルカム=カンモア）が、スコウシア王に就くはずであったが、ハイランド中北部地方のピクト族系のマリー伯領の領民たち、すなわちマクベス王の支援者たちが、マクベス王の善政を評価し、マクベス王の義理の息子ルーラッハを、担ぎ上げ、スコウシア王ルーラッハが誕生した⁴⁴。

軍事的に弱いルーラッハ王は、ハイランド南部地方のスコット族系の領民、ローランド地方のアングル族系の領民、ブリトン族系のアサル大領主の領民たちに支持されていたが、イングランド軍からも支援された軍事的に強いマルカム（マルカム=カンモア）に、1058年3月17日に、アングス州（Angus）の、エッシー（Essie : Eassie）で、奇襲攻撃を受け、殺害されてしまった⁴⁵。

この殺害により、マルカム（マルカム=カンモア）は、スコウシア王国、すなわちスコットランド王国に戻り、スコットランド王国の王位を継承した。

IV. イングランド侵攻

マルカム（マルカム=カンモア）は、1058年4月25日、スクーン宮殿で戴冠式を行い、法的に、スコットランド王マルカム3世（Malcolm III, King of Scotland : マルカム=カンモア（“偉大な族長”）Malcolm Cammore or “Great Head”, 1031.3.16-1093.11.13 : 在位 : 1058-1093）になった⁴⁶。

スコットランド王に就いたマルカム3世（マルカム=カンモア（“偉大な族長”））は、安定した大陸的な政治制度（フェダリズム Feudalism : 封建制度）、領主が家臣に土地（封土）を給与し、その代わりに家臣が領主に軍役義務を負う制度を学んでいたけれども、国政変革や社会的急変をのぞまなかった。その結果、マルカム3世は、慣習化した社会、すなわち血縁関係を重視した氏族制度、ケルト的社会、ケルト的教会を、マクベス王治世時のように、踏襲した。

そして、社会をより安定化するために、マルカム3世は、最初のアジェンダ（Agenda : 政策課題）として、当然社会的不安の要素であった、オークニー諸

島から、またスコットランド北端から略奪に遣って来るヴァイキングの対策を、考えなければならなかった。

そこで、マルカム3世は、スコットランド北部の治安をより安定化させるために、オークニー諸島の領主、オークニー伯シグルズの長男トルフィン=シグルソンの娘・ノルウェーの血を引くイーングボグ (Ingibiorg: Ingebiorg, 1030-1067) と、1059年に、結婚した⁴⁷。

この結婚は、当然、マルカム3世が政治経済学的利権を得るための、政略結婚であった。

このイーングボグとの政略結婚により、軍事同盟が結ばれ、マルカム3世は、スコットランド北端、およびオークニー諸島のヴァイキングからの略奪を防ぐことができた。

そして、マルカム3世は、ヴァイキングから、スコットランド北部の和平を取り付けた後、すぐにイングランドとの領土問題に関する外交政策に入った。この外交政策を、少しでも有利にするため、マルカム3世は、イングランド北部に対しは、軍事的プレッシャーを掛け、盟友であるノーサンブリア伯トスティグ=ゴドウィンソンには、会談を行った。

この外交政策は、マルカム3世の野心そのものであった。

マルカム3世は、スコットランド王としての地位を確立、不動なものにするために、イングランドとの国境が確定されていないボーダー地域の軍事力強化、領土拡大は、必須条件であった。

そこで、マルカム3世は、ノーサンブリア伯トスティグ=ゴドウィンソンが、1061年に、ローマへの巡礼で、ノーサンブリアを留守にしたとき、領土拡大のため、イングランド北部の郡、すなわちノーサンバーランド (Northumberland)、カンバーランド (Cumberland)、ウェストモーランド (Westmorland) に侵攻した⁴⁸。

この1061年の侵攻が、マルカム3世による第1回目のイングランド侵攻である⁴⁹。

一方、イングランドにおいては、国政に関わる一大事が起こっていた。

アングロ=サクソン系イングランド王位継承権保持者であった、ウェセックス伯ゴドウィン2男ハロルド=ゴドウィンソン（Harold Godwinson, 1022-1066.10.14：後のイングランド王ハロルド2世 Harold II、在位 1066.1.6-1066.10.14）が、エドワード証聖王の特使として、ノルマンディーに向かう途中、イングランド海峡で暴風に見舞われ、ポンティユー伯ガイ（Guy, Count of Pontheu, c. 1020-1100.10.13：ポンティユー伯在位 1053-1100）の領土に漂着してしまった⁵⁰。

このハロルド=ゴドウィンソンを助けるために、ノルマンディー公ギヨーム2世は、ポンティユー伯ガイに多額の身代金を支払った。

この恩義のために、ハロルド=ゴドウィンソンは、ノルマンディー公ギヨーム2世のナイト（knight）に臣従し、彼の娘アダラ（Adela of England, daughter of William I King of England, c. 1027-1087）と結婚することを誓った⁵¹。

この侵攻後、ノーサンブリアに帰って来たトスティグ=ゴドウィンソン伯は、軍事力強化が侵攻の抑止力、および反撃、撃退を理由に、領民に対し、重課税を課した。

これに対し領民は、1065年10月3日、北部ノーサンブリアが奪われたことや、ノーサンブリア伯トスティグ=ゴドウィンソンの専制政治に反対し、暴動、反乱を起こした。

この暴動の首謀者は、有力なアングロ=サクソン貴族であるマーシア伯エドウィン（Edwin, Earl of Mercia, ?-1017：在位 1062-1071）の弟モーカー（Morcar, Earl of Northumbria, ?-1087：在位 1065-1066）である。

この暴動、反乱の情報が、ノーサンブリア伯トスティグの兄ハロルド=ゴドウィンソン（Harold Godwinson, 1022-1066.10.14：後のイングランド王ハロルド2世 Harold II、在位 1066.1.6-1066.10.14）により、エドワード証聖王に伝えられた。

これによって、エドワード証聖王は、ノーサンブリア伯トスティグのノーサンブリア伯位職を解任し、このノーサンブリアの地から追放した。

トスティグが解任された後のノーサンブリア伯は、エドワード証聖王によって、マーシア伯エドウィン (Edwin, Earl of Mercia, ? -1017 : 在位 1062-1071) の弟モーカー (Morcar, Earl of Northumbria, ? -1087 : 在位 1065-1066) が、任命された。

解任に納得しない前ノーサンブリア伯トスティグ=ゴドウィンソンは、1065年、自身の妻ジュディス (Judith of Flanders, c. 1030-1095.3.5) の故郷、妻の兄ボールドウィン5世 (Baldwin V, Count of Flanders, 1012.8.19-1067.9.1) の住むフランダース (Flanders) に亡命した。

前ノーサンブリア伯トスティグ=ゴドウィンソンは、このフランダースの地において、義兄ボールドウィン5世の艦隊支援を取り付け、かつ自身の小さな海軍力を建て直した。

さらに、前ノーサンブリア伯トスティグ=ゴドウィンソンは、縁戚関係の従兄弟で、デンマーク王スウェイン2世 (Sweyn II : スウェイン=エストリッドソン Sweyn Estridsson, c. 1019-1076.4.28 : 在位 1047-1076) に、支援要請を求めするため、特使を送った。

トスティグ=ゴドウィンソンの母は、ジサ=ソーケルズドッター (Gytha Thorkelsdóttir, c. 997-c. 1096) であり、彼女の兄は、デンマーク伯ウルフ (Ulf Jarl : ウルフ=トルシルソン Ulf Thorgilsson) である。彼の息子は、デンマーク王スウェイン2世 (スウェイン=エストリッドソン) である。

よって、トスティグ=ゴドウィンソンが、近い血縁関係の従兄弟デンマーク王スウェイン2世に、軍事的支援を求めたのは、納得できる。

だが、従兄弟デンマーク王スウェイン2世は、現実問題として、当時、最大の軍事力を保持しているノルウェー王国から脅威を与えられている状況として、この要請を断った。

イングランド軍の軍事力には、敵わないことを悟っていたトスティグ=ゴドウィンソンは、さらに、当時最大の海軍力を保持していたノルウェー王ハラルド3世 (Harald III : ハラルド=ハルローラーデ Harald Hardråde, 1015-1066.9.25 : 在位 1046-1066) に、軍事支援を求めため、特使を送った。

この特使の要請には、イングランド王を倒し、その後、ノルウェー王ハラルド3世（ハラルド=ハルローラーデ）がイングランド王に就き、自身トスティグ=ゴドウィンソンが、下臣になるという、条件付きであった。

このような条件を鑑み、ノルウェー王ハラルド3世（ハラルド=ハルローラーデ）は、軍事的支援を承諾した。

一方、スコットランド軍の侵略を受けていたイングランドでは、1066年1月5日に、サクソン王エドワード証聖王が亡くなると、王位継承者を巡り混乱に陥った。

その混乱の原因は、サクソン王エドワード証聖王自身の性格、内気で優柔不断な性格によるものであった。

具体的には、サクソン王エドワード証聖王が、妻エディス（Edith of Wessex, daughter of Godwine, c. 1052-1075.12.18）との間に、後継者に恵まれなかったことから、1051年、自身を慕ってフランスから訪れて来たノルマンディー公ギヨーム2世（後のイングランド王ウィリアム1世）に、次期王位を継承させるという王位譲渡の約束をしていた⁵²ことである。

また、サクソン王エドワード証聖王が、1066年1月5日、亡くなる前に、遺言で、ギヨーム2世との約束を破棄し、妻ウェセックスのエディス（Edith of Wessex, c. 1025-1075.12.18）の兄で、ウェセックス伯ゴドウィン（Godwine, Earl of Wessex：在位 1053）の2男ハロルド=ゴドウィンソン（Harold Godwinson：後のイングランド王ハロルド2世（Harold II, c. 1022-1066.10.14：在位 1066.1.6-1066.10.14）を、王位継承者に指名した⁵³ことである。

だが、サクソン王エドワード証聖王には、王位継承者を決定する決定権は、無かった。

決定権は、当時の慣習法として、ウィタン（Witan）、あるいはウィテナジモット（Witenagemot）と称せられるアングロ=サクソン賢人評議会が持っていた。

このウィタン、あるいはウィテナジモットの賢人評議会は、法的に、サクソン王エドワード証聖王後の王位継承者順位として、第1位のウェセックス伯エドワード=ジ=アシリング (Edward the Ætheling : エドワード=ジ=エグザイル Edward the Exile, 1016-1057.4.10) の長男エドガー=ジ=アシリング (Edgar the Ætheling, c. 1051-c. 1126 : 在位 1066.10.15-1066.12.10) を、選んだ。

だが、実際には、ウィタン賢人評議会は、エドガー=アシリングが若いという理由で、急遽、サクソン王エドワード証聖王の妻エディス (Edith of Wessex, daughter of Godwine, c. 1052-1075.12.18) の兄、つまりサクソン王エドワード証聖王の義兄、王位継承者順位、第2位のハロルド=ゴドウィンソンを選んだ。

そして、サクソン人のハロルド=ゴドウィンソンは、1066年1月6日、イングランド王ハロルド2世 (Harold II, c. 1022-1066.10.14 : 在位 1066.1.6-1066.10.14) として即位した。

また、同日1月6日に、ハロルド2世は、急遽、戴冠式に必要な王冠・王剣、王笏、王杖を、亡きエドワード証聖王の居城ウィンチェスター城 (Winchester Castle) から取り寄せ、エドワード証聖王命での建設途中のウェストミンスター=アベイ (Westminster Abbey) で、戴冠式を挙げた。

このハロルド2世の戴冠式後、戴冠式に必要な王冠・王剣、王笏、王杖は、王都ウェセックスのウィンチェスター城へ戻された。

この王位決定に不満を、一層、募らせたのは、ハロルド2世の弟であり、フランダーズに亡命している前ノーサンブリア伯トスティグ=ゴドウィンソンである。

前ノーサンブリア伯トスティグ=ゴドウィンソンは、自身の不満の気持ちを表すために、1065年5月、義兄ボードウィン5世と共に、イングランド南部、ワイト島 (Isle of Wight) を侵略した。その後、南東岸を艦隊で攻撃し、ケント州のサンドウィッチ (Sandwich) まで、各地の教会の財宝を略奪し続けた。

その後、トスティグ=ゴドウィンソンは北上し、ノーサンブリアの主要都市ヨーク (York) に入った。

ヨークでも同じように、トスティグ=ゴドウィンソンは、略奪、暴力行為を繰り返した。

この暴力行為に対し、弟の現ノーサンブリア伯モーカー（Morcar, Earl of Northumbria, ? -1087：在位 1065-1066）は、イングランド第2の軍事力を要する兄のマーシア伯エドウィン（Edwin, Earl of Mercia, ? -1017：在位 1062-1071）と、兄弟連合軍を結成し、反乱軍の拠点であるヨークのトスティグ居住地を攻撃した。

ヨークでの兄弟連合軍の攻撃により、身の危険を感じた前ノーサンブリア伯トスティグ=ゴドウィンソンは、盟友であるマルカム3世のスコットランドに逃げ込んだ。

この兄弟連合軍に対し、前ノーサンブリア伯トスティグは、1066年9月末に、軍事支援の要請を承諾していたノルウェー王ハラルド3世（ハラルド=ハルローラデ）と合流し、同盟軍を結成し、ノーサンブリアのヨークに侵攻した。

この侵攻は、軍事的に圧倒的に優位な前ノーサンブリア伯トスティグとハラルド3世の同盟軍が、勝利を収めつつあった。敗北が近づいた現ノーサンブリア伯モーカーと、彼の兄であるマーシア伯エドウィンは、ヨークから逃亡した。

この侵攻の情報を得たトスティグの兄ハロルド2世は、大軍を率いて、弟のトスティグとハラルド3世（ハラルド=ハルローラデ）の同盟軍と戦うため、ヨークへ、急いだ。

その結果、スタンフォード=ブリッジの戦い（Battle of Stamford Bridge）が勃発し、弟のトスティグとノルウェー王ハラルド3世（ハラルド=ハルローラデ）は、1066年9月25日、月曜日に戦死した⁵⁴。

ハロルド2世がヨークを平穏にしたことから、ハロルド2世支配下のヨークに、逃亡先から、マーシア伯エドウィンと彼の弟ノーサンブリア伯モーカーが、帰って来た。

一方、サクソン王エドワード証聖王との王位譲渡の約束を信じていたノルマンディー公ギヨーム2世は、このサクソン王ハロルド2世の王位継承に納得い

かず、反発し、政権を倒すために、1066年9月12日、ノルマンディー、セント=ヴァレリー（St. Valéry）港に、戦闘可能な船団を集結させた。

そして、ギョーム2世は、大船団が組織されたことを確認し、また、1066年9月23日、ハロルド2世がロンドに不在であることの情報を得た後、1066年9月27日夕方、セント=ヴァレリー港から、出航した。そして、大船団は、翌9月28日、イングランドの南部、一面平坦な長い砂浜海岸・ペヴェンジー海岸（shore of Pevensey）に無血上陸した（この大船団の内、2隻だけが、闇夜の中、前船舶の光を見失い、ロムニの港に到着した）⁵⁵。

そして、ノルマンディー軍は、上陸には適していたペヴェンジーを後にして、東へ、侵略のため、防衛に適している小高い丘があるヘイスティングズ（Hastings）へ向かった。そして、そのヘイスティングズの地に、9月29日、人造の小さな丘陵に木造の要塞を建設し、そこを当分の間、野営地にした⁵⁶。

このノルマンディー公ギョーム2世のイングランド上陸を耳にしたハロルド2世は、彼をイングランドから追い出すために、早馬にて、ロンドンに急いだ。

ハロルド2世は、10月6日に、過度の疲労を伴ってロンドンに戻った。

そして、ハロルド2世は、疲労困憊した歩兵軍の到着を待って、またロンドンで志願兵を徴募し、来るべきノルマンディー公ギョーム2世軍戦に備えた。具体的に、ハロルド2世は、ロンドンからヘイスティングズに通じる主要街道から離れ、見晴らしの良い“グレーのリンゴの木（The Grey Apple Tree）”が立っているカルベック=ヒル（Caldbec Hill）に陣を敷いた。

そして、ハロルド2世は、このカルベック=ヒル（Caldbec Hill：後のバトルという地名）の陣を守るために、すなわちギョーム2世の北進を阻止するために、南のセンラック=ヒル（Senlac Hill）に、“サクソン人の楯の壁（The Saxon Shield Wall）”という防衛のための陣を形成した。

一方、ギョーム2世は、ヘイスティングズの北、テルハム=ヒル（Telham Hill：後のバトル Battle という地名）で陣を敷いた。

センラック=ヒルの麓に流れるサンドレイク小川（Sandlake Stream）の北側にハロルド2世軍（ハロルド2世+アングロ=サクソン貴族）、南側にギョーム2世軍（ギョーム2世+ノルマン貴族）が、対峙した。

そして、両軍は当然のごとく、1066年10月14日、土曜日の朝、午前9時に衝突し、ヘイスティングズの戦い（the Battle of Hastings）が始まった⁵⁷。

ノルマン軍は、弓部隊が、“サクソン人の楯の壁”に向かって、天高く矢を射り、サクソン人の顔に当たるようにし、また騎馬部隊が、攻め込んできたサクソン人兵に立ち向かい、防衛のための“サクソン人の楯の壁”を壊した。結果的には、ノルマン軍の戦術、弓部隊と騎馬部隊の活躍により、遥かにノルマン軍の方が有利になり、勝利した。

そして、イングランド王であるサクソン王ハロルド2世は、ノルマン兵が放った矢が右目に当たり、その矢を手で抜いたが、その負傷が原因で、1066年10月14日、亡くなった⁵⁸。

ハロルド2世が殺害されたことにより、フランスのノルマンディー公ギョーム2世の勝利が、確実となった⁵⁹。

翌日の10月15日、テルハム=ヒル（バトル）の地から、ヘイスティングズの野営地に戻っていたギョーム2世は、ヘイスティングズでの戦死者を、手厚く弔うよう指示した。そして、ギョーム2世は、デイン人の慣習に則り、ハロルド2世の妻エディス=スワンネック（Edith Swan-Neck）に、夫ハロルド2世の亡骸を確認させた。

妻のエディス=スワンネックは、夫のハロルド2世を確認できる唯一の人物であった⁶⁰。

また、ハロルド2世の母ジサ=ソーケルズドッター（Gytha Thorkelsdóttir, c. 997-c. 1069）は、息子ハロルド2世の亡骸を埋葬するため、その亡骸と息子の体重と同じ金との交換で、引き取りたいというを申し出を行った⁶¹。

だが、ノルマンディー公ギョーム2世は、拒否した。

ハロルド2世が亡くなったことにより、生き残ったサクソン人の貴族や有力者たちは、首都ロンドンを守るため、ロンドンに集結した。

そのロンドンで、ウィタン、あるいはウィテナジモットのアングロ=サクソン賢人評議会は、早急に、会議を召集し、新イングランド王を決定しなければならなかった。

そして、召集された賢人評議会の中で、カンタベリー大司教ステイガンド (Stigand, archbishop of Canterbury, c. 995-1072.2.22 : ウィンチェスター司教 1047-1070 : カンタベリー大司教 1052-1070) の主導のもと、10月15日、新イングランド王エドガー=ジ=アシリングが決定された。

このウィタンの賢人評議会の中に、前ウスター司教であったヨーク大司教アルドレッド (Aldred: Ealdred, ? -1069.9.11 : ウスター司教 1046-1062 : ヨーク大司教 1061-1069)、マーシア伯エドウィンと彼の弟ノーサンブリア伯モーカーも含まれていた⁶²。

さらに、その翌日の10月16日、このヘイスティングズの地で、ギョーム2世は、サクソン人からの敗北、降服、服従を認める使者を5日間待った。この5日間の間に、ギョーム2世は、降服の書状を有力貴族が持ってくることを期待していたが、来なかったため、サクソン人たちが集結している首都ロンドンへ、直接進撃し、侵略、占領を目指そうとした。

だが、現実問題として、ギョーム2世は、サクソンの有力貴族たち、特にマーシア伯エドウィンと彼の弟ノーサンブリア伯モーカーが集結しているロンドンに、直接進撃するのは危険と判断し、迂回して、ロンドン制圧を目指すことにした。

そこで、ギョーム2世は、侵略計画を継続させるため、軍事的に重要な地ドーバー、すなわちノルマンディーからの食糧や武器の補給を、また自身や下臣の往来を、より安全に、より早くするための地、10月20日、ドーバー占領を目指した。

そのドーバーへの途中に、ギョーム2世は、ロムニイ (Romney) の地、以前1066年9月28日、大船団を組んでイングランドを侵略するためペヴェンジー海岸に到着した時、2隻の船だけがロムニイの港に着き、ロムニイの船員全員

が殺されたことの復讐として、立ち寄った。当然の如くとして、ロムニの町は焼き払われた⁶³。

ドーバーのサクソン人を、10月21日に無血降服させたギョーム2世は、兵士たちの間で、赤痢（dysentery）が流行り、その地に8日間滞在した⁶⁴。

その滞在中に、ギョーム2世は、ウィタンで決定されたイングランド王エドガー=ジ=アシリングが、カンタベリー大聖堂で、ステイガンド大司教のもと戴冠式を挙げる、という情報を得たので、それを阻止するために、素早くカンタベリーに向かった。

だが、カンタベリー大司教ステイガンドは、召喚されたウィタン、あるいはウィテナジモットのアングロ=サクソン賢人評議会の出席のため、ロンドンに行っており、カンタベリーを留守にしていた。

そのカンタベリーのサクソン人および教会有力者たちを、ギョーム2世は、10月29日、降服させた。その後、ギョーム2世は、体調を壊し病気になり、病気が治るまでの4週間、カンタベリーに留まった⁶⁵。

この時点で、エドガー=ジ=アシリングが、カンタベリー大聖堂で戴冠式を挙げていないので、戴冠式に必要な王冠をはじめとして宝物類は、依然として、亡きエドワード証聖王の居城に保管されたままであった。

そのカンタベリー滞在中に、ギョーム2世は、戴冠式には絶対に必要な王冠を獲得するため、王冠が保管されてある亡きエドワード証聖王の居城、妻エデイスが住むウィンチェスター城へ、交渉人を行かせた⁶⁶。

有力なサクソン兄弟、マーシア伯エドウィンと彼の弟ノーサンブリア伯モーカーが、ロンドンから北に向かったという情報を得たギョーム2世は、カンタベリーを出発し、首都ロンドンを目指すため、西へ行軍した。

そのカンタベリーを出た直後に、ギョーム2世は、自身の命を受けた交渉人から、王冠、王剣、宝笏、そしてウィンチェスターの重要宝物を手に入れた⁶⁷。

ロンドン橋まで来たが、依然としてロンドン市内には、多数の有力な貴族が、武装状態であったので、ギョーム2世は、無用な戦争を避け、さらに西ウィンチェスターを目指し行軍した。

そして、ギョーム2世は、ウィンチェスターを降服、占領した。

ギョーム2世が、旧王都であったウィンチェスターを占領したということは、ウェセックスの全土、主教を掌握し、かつその南東の諸港を統制下に置いたということを意味している⁶⁸。

さらに、ギョーム2世は、ウィンチェスターから北上し、ウォリングフォード (Wallingford) へ行軍した

このウォリングフォードは、古きローマ時代からテムズ川上流の交通の要衝であり、軍事的要害の地であった。その地にギョーム2世は、11月中頃到着し、野営地を敷いた。

その野営地に、カンタベリーの占領を知り、最早エドガー=ジ=アシリングに勝ち目がないことを悟ったカンタベリー大司教ステイガンドが、降服の意を伝いに遣って来た⁶⁹。

さらに、ギョーム2世は、東へ行軍し、12月10日頃に、ヘレフォード (Hereford) のリトル=バーカムステッド (Little Berkhamsted) に到着した。

そのギョーム2世が陣を構えているリトル=バーカムステッドに、エドガー=ジ=アシリング、ヨーク大司教アルドレッド、マーシア伯エドウィンと彼の弟ノーサンブリア伯モーカー、サクソンの有力者たちが、降服しに遣って来た⁷⁰。

ギョーム2世は、次期王位に指名されているエドガー=ジ=アシリングと、北部の有力大貴族マーシア伯エドウィンと彼の弟ノーサンブリア伯モーカーの兄弟を、拘束し人質とした。

ギョーム2世は、直接ロンドンを進撃するのではなく、迂回してロンドン周辺の主要都市を、確実に占領するという戦術が功を奏して、ロンドンに入ることができた。

ノルマンディー公ギョーム2世の勝利により、ギョーム2世は、1066年12月25日、ウェストミンスター=アベイ (Westminster Abbey) で、ヨーク大司教アルドレッドのもと、戴冠式を挙げ、イングランド王ウィリアム1世 (William I, the Conqueror (征服王), 1027-1087.9.9 : 在位 1066.12.25-1087.9.9) となった。

ウィリアム1世のことを、後世の経済史家によってニックネームで、征服王と称されている。

だが、ウィリアム1世自身にとっては、サクソン王エドワード証聖王との約束により、王位に就いたのだから、イングランドを征服したのではなく、征服王というニックネームは、間違いであると主張するであろう。

なお、ウィリアム1世は、エドワード証聖王が建造したウェストミンスター=パレスより北東の沼沢地に、1067年、木造建築の王宮（現在のロンドン塔 the Tower of London）を建造し、そこで国政を行った。

イングランド王に就いたウィリアム1世は、すぐに、人質のモーカー伯を罷免し、ノーサンブリア伯位を剥奪した。

そして、ウィリアム1世は、人質のエドガー=ジ=アシリング、母アガサ、姉（長女）マーガレット、姉（2女）クリスティーナの一家、およびマーシア伯エドウィンと彼の弟、前ノーサンブリア伯モーカーの兄弟は、自身の宮廷（Court）にて、軟禁状態に置いた⁷¹。

なお、ノーサンブリア伯位を、ダンバー伯のゴスパトリック（Gospatric : Cospatric, Eatl of Dunber, Earl of Northumbria, 1040-1080.12.15 : 在位1067-1071）は、1067年、ウィリアム1世にオマージュ（Homage : 臣従礼）を執り、お金で買った⁷²。

そして、ウィリアム1世は、ロンドンの制圧が完了し、一旦、1067年3月に、北部での謀反を起こさせないために、人質のエドガー=ジ=アシリング、マーシア伯エドウィンと彼の弟、前ノーサンブリア伯モーカーの兄弟を連れ、一旦ノルマンディーに帰った。

なお、人質エドガー=ジ=アシリングの家族、母アガサ、姉（長女）マーガレット、姉（2女）クリスティーナは、依然として変わりなく、ウィリアム1世の宮廷（Court）にて、軟禁状態に置かれた⁷³。

そして、ウィリアム1世は、本格的にイングランド全土を征服するために、すなわちドゥームズデイ=ブック（The Domesday Book : 公平な地代を得るた

めの国勢調査簿)によるフェダリズム (Feudalism : 封建制度) を強化するために、再び 1067 年 12 月、ロンドンに戻った。

その時も、ギョーム 2 世は、人質のエドガー=ジ=アシリング、マーシア伯エドウィンと彼の弟、前ノーサンブリア伯モーカーの兄弟を連れ、ロンドンに戻った。

ロンドンに戻って来た人質のエドガー=ジ=アシリング、マーシア伯エドウィンと彼の弟、前ノーサンブリア伯モーカーの兄弟は、ウィリアム 1 世の宮廷 (Court) にて、囚われの身となっていた⁷⁴。

ロンドンに帰るや否やウィリアム 1 世は、イングランド南部の征服統治政策を、徐々に北上させ、イングランド全土を征服し始めて行った。

すなわち、ウィリアム 1 世は、征服していった土地 (封土) を、自身のノルマン系の家臣や、自身にオマージュ (Homage : 臣従礼) を執ったアングロ=サクソン貴族に給与し、その代わりに、軍役義務を課すフェダリズム (Feudalism : 封建制度) を確立させ、封建的主従関係を強化させていったのである。

家族と共に、ウィリアム 1 世の宮廷にて、軟禁状態にあったマーガレット (後の聖マーガレット) は、大陸のフェダリズムと少し異なるアングロ=サクソンのフェダリズム (封建制度) を学んだ。

すなわちアングロ=サクソンのフェダリズムとは、「国王の家臣は下臣であり」、「家臣の臣下は下臣である」。そして「臣下は国王の下臣でもある」、ということである。

具体的には、国王に、平時および何か危機が迫ったら、家臣と臣下は、国王に対し軍役奉仕のため、駆け付けなければならないということである。

キングの家臣はバロン (Baron : 国王から直接に封土を受け取っている貴族・諸侯) であり、バロンの臣下はナイト (Knight : 騎士) である。よって、「ナイトはキングの下臣」である。

よって、キングの有事の際は、ナイトは、駆け付けなければならないということである。

このことにより、イングランド国内に住む多くのサクソン貴族たちは、危機的状态に陥ってしまった。

この危機的状态から逃れるために、すなわち身に危険を感じたイングランド内の多くのサクソン貴族たちは、切実にノーサンブリア (Northumbria) 北部、スコットランド王国との国境沿いにある穀倉地帯ロシアン (Lothian) へ逃げたり、国外へ亡命したりするようになっていった。

このノーサンブリアへの亡命の切っ掛けは、当時、ノーサンブリアは、ウィリアム1世を、イングランド王として認めていない唯一の地域であった、からである。

その1066年の翌年、スコットランド王国では、イーンガボークが、1067年 (エドガー=ジ=アシリングの姉マーガレット (Margaret : 後の聖マーガレット Saint Margaret of Scotland, c. 1046-1093.11.16) が、スコットランドのセント=マーガレットホープ (St Margaret's Hope) に漂着した1068年の前の年)に、原因不明の死を遂げていた⁷⁵。

亡命について、1番切実に考えたのは、代々続いたアングロ=サクソン王家継承者で、イングランド王の王位継承者第1位であったエドガー=ジ=アシリングである。イングランド王の直接継承者であるエドガー=ジ=アシリングが、命を狙われるのは、当然のことであった。

ウィリアム1世は、1068年初期、自身の権力固めのため、サクソン人の軍事力を削ぐため、ウェセックス (Wessex) のエクセター (Exeter) に行軍した⁷⁶。サクソン人の危機的状況の中、1068年5月11日、ウィリアム1世の王妃マティルダ (Matilda of Flanders, 1031-1083.11.2) が、フランスからイングランドに、遣って来て、ウェストミンスター=アベイ (Westminster Abbey) で、ヨーク大司教アルドレッドのもと、戴冠式を挙げた⁷⁷。

このウィリアム1世の王妃マティルダが、この戴冠式を挙げることによって、ますます、エドガー=ジ=アシリング一家の危機的状態が増した。

また、身の危険を感じていたマーシア伯エドウィンは、危険を回避させるために、ウィリアム1世の娘の1人と結婚を試みた。だが、この野望は失敗に終

わり、マーシア伯エドウィンは、弟の前ノーサンブリア伯モーカーと共に、ウィリアム1世の宮廷（Court）から、郷里の北部に逃げた⁷⁸。

なお、イングランド北部に帰って来たマーシア伯エドウィンと、弟の前ノーサンブリア伯モーカーのもとに、多くの反ノルマン系のアングロ=サクソン貴族が、ヨークに集結し、ノーサンブリア北部で、暴動を起こしていった。

この暴動が起こったヨークのノーサンブリア地域を、ウィリアム1世は、自身の敵とみなし、暴動を鎮圧するために、1068年初夏、精鋭の軍隊1個師団と共に、ロンドンから、ヨークに行軍した⁷⁹。

この1068年初夏の行軍が、ウィリアム1世による第1回目のヨーク行軍、滞在である⁸⁰。

また、イングランド軍によるエクセター（Exeter）への軍事的制圧により、イングランド政府は、エクセターを統制下に置くことができた。

その結果、イングランド政府は、ドゥームズデイ=ブック（The Domesday Book：国勢調査簿）によるフェダリズム（Feudalism：封建制度）を強化していくなか、亡命先アイルランドから帰っていたイングランド王ハロルド2世の息子、ウェセックスのゴドウィン（Godwin of Wessex, b. 1049）と、ウェセックスのエドモンド（Edmund of Wessex, b. 1049）を、1068年夏、エクセターの人びとにより、再びアイルランドに追い返すことができた⁸¹。

エドガー=ジ=アシリングが拘禁生活を送っていたロンドン近郊の宮廷では、王妃戴冠式の最大セレモニーのため、多数のノルマン警備兵が駆り出されていた。

ウィリアム1世が精鋭軍1個師団と共にヨークに行っており、また王妃マティルダ戴冠式の最大セレモニー後、ノルマン警備兵が手薄になった隙を見計らって、1068年夏、母アガサ（Agatha, wife of Edward the Exile, c. 1030-1070）は、長女マーガレット（Margaret：後の聖マーガレット Saint Margaret of Scotland, c. 1046-1093.11.16）、2女クリスティーナ（Cristina, daughter of Edward the Exile, c. 1047- c. 1100）、長男エドガー=ジ=アシリング（Edgar the Ætheling, c. 1051-c. 1126：在位 1066.10.15-1066.12.10）とともに、ウィリア

ム1世の宮廷から脱出し、近くのテムズ川河口から船舶で、母アガサの故郷ハンガリーに向かった⁸²。

このロンドン近郊の宮廷から脱出を画策したのは、アングロ=サクソン人、ノーサンブリア伯のゴスパトリック（Gospatric : Cospatric, Eatl of Dunber, Earl of Northumbria, 1040-1080.12.15 : 在位 1067-1071）である。

このゴスパトリック伯は、1067年に、ウィリアム1世征服王から、ノーサンブリアの伯位を、お金で買った人物であった。

ゴスパトリック伯は、元々、家系的にアングロ=サクソン王家の支持者であり、当然、エドガー=ジ=アシリングの有力な支援者であった⁸³。また、ノーサンブリア伯の領民たちも、代々、アングロ=サクソン王家の支持者であった。

ゴスパトリック伯が、お金で、ノーサンブリア伯の伯位を買い、ノルマンディー公のイングランド王ウィリアム1世の下臣になった。

言い換えると、ゴスパトリック伯は、ウィリアム1世にお金を上納することにより、ノーサンブリアの領地を保有することができ、ウィリアム1世が施行しているフェダリズム（Feudalism : 封建制度）の中に組み込まれていったのである。

だが、ウィリアム1世を、イングランド王として認めていないノーサンブリア伯領の多くの有力な貴族たちは、この経緯に納得がいかなかった。

この納得のいかないことが、ノーサンブリアの多くの有力な貴族たちを、強い反ノルマン、言い換えると急進的なエドガー=ジ=アシリング派へと動かし、アガサー家を支援する方向に向かわせた。

同様に、ゴスパトリック伯自身もエドガー=ジ=アシリング派となり⁸⁴、言い換えると、ウィリアム1世に反抗し、1068年夏、エドガー=ジ=アシリングの脱出を手助けするようになったのである。

エドガー=ジ=アシリング一家は、1068年夏、ウィリアム1世の宮廷から、テムズ川河口を下り、外洋、北海に出た船舶は、強烈な暴風に見舞われ遭難し、その1068年夏に、スコットランドの海岸に漂着してしまった。

そのスコットランドの漂着地は、ファイフ州（Fife）、ノースクイーンズフェリー（North Queensferry）、現セント=マーガレットホープ（St Margaret's Hope）と呼ばれる場所である⁸⁵。

その漂着地セント=マーガレットホープは、まさに、フォース湾の北岸の村ロサイス（Rosyth）の南であり、ダンファームリン（Dunfermline）にあるマルカム3世（マルカム=カンモア）の宮殿、南数マイルの地点である。

スコットランド、1068年ノースクイーンズフェリーに上陸したアングロ=サクソン人の長女マーガレットを、マルカム3世が快く向かい入れた様子を、スコティッシュ=ナショナル=ポートレート=ギャラリー（Scottish National Portrait Gallery）所蔵、画家ウィリアム=ブラッセイ=ホール（William Brassey Hope, 1846.11.7-1917.10.22）によって、1899年に描かれている。

マルカム3世（マルカム=カンモア、37歳）は、マーガレット（後の聖マーガレット、24歳）に、1057年4月、エドワード証聖王の宮廷であって以来、このノースクイーンズフェリー、現セント=マーガレットホープと呼ばれる場所で、1068年夏に再開した⁸⁶。

スコットランド王マルカム3世（マルカム=カンモア）は、遭難したエドガー=ジ=アシリング一家をはじめ、遭難した全てのイングランド人を、快く向かい入れ、自身のダンファームリン宮廷で保護した。

また、スコットランドのノースクイーンズフェリーで、1068年夏に成長したマーガレット（後の聖マーガレット）と再開したマルカム3世は、自身の王妃インガボグを1067年に無くしていたことから、非常に魅力的なマーガレットに好意を持つようになっていた⁸⁷。

当時、ヴァイキングの中で、軍事的最大の優位を占めていたノルウェー王ハラルド3世（ハラルド=ハルローデ）が、1066年9月25日、月曜日にスタンフォード=ブリッジの戦いで戦死した。

このノルウェー王ハラルド3世（ハラルド=ハルローデ）の戦死により、元ノーサンブリア伯トスティグ=ゴドウィンソンの従兄弟で、1度トスティグ=ゴドウィンソンの軍事支援を断ったデンマーク王スウェイン2世（スウェイン=エ

ストリッドソン)が、1068年夏頃に、領土拡大という食指を、イングランドに伸ばし始めていた。

デンマーク王スウェイン2世(スウェイン=エストリッドソン)は、デンマークのウルフ伯(Ulf the Jare: ウルフ=トルシルソン Ulf Thorgilsson, c. 988-1026.12.31)と、エストリッド=スヴェンデスダッター(Estrid Svendsdatter, c. 997-c. 1073)との長男であった。

エストリッド=スヴェンデスダッターは、デンマーク王スウェイン1世(Sweyn I: Sven I: デンマーク王 985-1014: ノルウェー王 985-995、1000-1014: イングランド王、1013-1014、960-1014.2.3)の娘であり、またイングランド王クヌート1世(Cnut: Canute: Knut I, 995-1035.11.12: イングランド王在位 1016-1035: デンマーク王在位 1018-1035: ノルウェー王在位 1028-1035)の異母妹であった。

このような家系から考えると、デンマーク王スウェイン2世(スウェイン=エストリッドソン)が、イングランド王位継承権を要求するのは、当然の結果であった。

ウィリアム1世に敵意を持ち、エドガー=ジ=アシリングを擁護するマルカム3世は、エドガー=ジ=アシリング、ノーサンブリア伯ゴスパトリックと共に、1068年夏、ノーサンブリアのヨークにて、ノルマン軍の拡大を阻止しようとしていた。

ヨークにエドガー=ジ=アシリングが現れたという情報を得たウィリアム1世は、1068年夏以降、反抗的なノーサンブリア伯ゴスパトリックを罷免し、1069年1月、新たにノーサンブリア伯に、タンクレッド領主ロバート=ドゥ=コミネス(Robert de Commines, Lord of Tancred, 1022-1069.1.28: ノーサンブリア伯在位 1069.1-1069.1.28)を任命し、500名以上の兵士と共に、エドガー=ジ=アシリングを捕らえるため、ノーサンブリア北部のダラム(Durham)に送った⁸⁸。

ウィリアム1世に敵意を持ち、エドガー=ジ=アシリングを擁護するマルカム3世は、イングランドの王位継承を要求するデンマーク王スウェイン2世(ス

ウェイン=エストリッドソン)に援護を求め、すぐに合流、連合し、1069年イングランド北部に侵攻した⁸⁹。

この1069年の侵攻が、マルカム3世による第2回目のイングランド侵攻である⁹⁰。

マルカム3世とエドガー=ジ=アシリング、およびデンマーク王スウェイン2世(スウェイン=エストリッドソン)の連合軍は、巨大な軍事力を要するデンマーク海軍(ディン人)の活躍により、ノーサンブリアのヨークを陥落、占領した。

ヨーク陥落後、ウィリアム1世から、エドガー=ジ=アシリングの捕縛を命ぜられた新ノーサンブリア伯ロバート=ドゥ=コミネスは、ウィリアム1世軍(ノルマン軍)500名以上の兵士と共に、ダラム近郊まで到着した。

そのダラム近郊において、ノーサンブリア伯ロバート=ドゥ=コミネスは、ダラム司教エシエルウィン(Ethelwin, ?-1071:在位1056-1071)から、あなたの行動を阻止するために、大規模のアングロ=サクソン軍が配置されている、という忠告を受けた。

だが新ノーサンブリア伯ロバート=ドゥ=コミネスは、ダラム司教エシエルウィンの忠告を無視し、ダラム市内に入ったために、1069年1月28日早朝、多くのウィリアム1世兵士と共に、殺害された⁹¹。

ノーサンブリア伯ロバート=ドゥ=コミネスが、1069年1月28日に殺害されたことにより、ノーサンブリア伯に、再度、ゴスパトリックが就いた。

これに激怒したウィリアム1世は、ヨークへ、大規模なイングランド軍(ノルマン軍)と共に、1069年2月に行軍し、4月初旬まで滞在した。

この1069年2月から4月初旬が、ウィリアム1世による第2回目のヨーク行軍、滞在である⁹²。

そして、ウィリアム1世は、まず初めに連合軍の軍事力を削ぐため、言い換えると連合軍を引き裂くために、デンマーク王スウェイン2世(スウェイン=エストリッドソン)に対し、デインゲルト(Danegeld:デイン人に支払うための

土地課税：デイン人に出て行ってもらうための立退料)を支払い、デンマークに、帰ってもらった。

これにより、連合軍が解消され、マルカム3世は、スコットランドに退却せざるを得なくなった。

反対に、ウィリアム1世は、ヨークを死守し、ノーサンブリアを支配下に置くことができた。

だが、イングランド王位継承権を要求するデンマーク王スウェイン2世(スウェイン=エストリッドソン)が、1069年秋、大艦隊を引き連れ、ノーサンブリア海岸に遣って来た。

デイン人・ヴァイキングによる略奪のため、イングランド北部、ノーサンブリアでは、再び混乱が生じた。

このデイン人による略奪を止めさせるために、ウィリアム1世は、同年1069年冬、再度、ノーサンブリア、ヨークに向かい、そして、1069年クリスマス後、デイン艦隊を沿岸から遠ざけることによって鎮圧させた⁹³。

この1069年冬が、ウィリアム1世による第3回目のヨーク行軍、滞在である⁹⁴。

一方、スコットランドのマルカム3世は、1068年夏、ノースクイーンズフェリーで、成長し、聡明で、清楚で非常に魅力的なマーガレット(後の聖マーガレット)に再開して以来、心をより惹かれるようになっていた。

そして、マルカム3世は、王妃イーングボークを1067年に無くしていたこともあって、1070年に、第2番目の妻として、ダンファームリン=アベイ(Dunfermline Abbey)で、アングロ=サクソン人のマーガレット(後の聖マーガレット)と再婚した⁹⁵

この1070年、ダンファームリン=アベイでの結婚式の様子を、ナショナル=ミュージアム=スコットランド(National Museums Scotland)所蔵、アレクサンダー=ランシマン(Alexander Runciman, 1736.8.15-1785.10.4)によって、1771年頃に描かれている⁹⁶。

マルカム3世とマーガレット（後の聖マーガレット）の結婚は、スコットランド人とアングロ=サクソン人の同盟を意味する。

言い換えると、このマーガレットが、ウェセックス伯エドガー=ジ=アセリングの姉マーガレットであるため、マルカム3世が、アングロ=サクソン王家最後の継承者、すなわちイングランド王位継承者最高位のエドガー=ジ=アセリングと軍事同盟を結んだということを、意味したのである。

この同盟は、当然、マルカム3世が、エドガー=ジ=アセリングのイングランド王位継承を、実現させるための援助ができるということであり、公的にイングランドに侵攻できるという口実を得たのである。

いわゆる、マルカム3世にとって、この結婚は、政治経済学的利権を得るための略再婚であった。

結婚後、王妃マーガレット（後の聖マーガレット）は、マルカム3世に対し、国政に対する改革を進言した。

というのは、マルカム3世が、治世当初から、慣習化していたケルト的社会、ケルト的教会を、マクベス王治世時のように、踏襲していたのに対し、それよりも王権にとって、より発展的なアングロ=サクソンのフェダリズム（封建制度）を、国政の取入れ、王国をより安定化させたかったからである。

ケルト社会では、氏族制度で、血縁関係を重視し、その血縁のリーダーが国王になって、国家を統治していた。血縁だけでは、小さな国家しか成立しなく、経済的発展が限られており、戦費が少額になり、領土拡大に関しては、あまり考えられなかった。

だが、アングロ=サクソンの政治経済制度、フェダリズム（Feudalism：封建制度）を導入することにより、国王の命が末端まで行き届き、土地と人民を支配し、所領を統治することができる。このことは、少しでもより多くの土地、所領を獲得することによって、そこからの地代収入により、軍事費を上げることができ、国家が潤い、更なる領土拡大が望めるのである。

この地代収入は、ウィリアム1世が行っていたドゥームズデイ=ブック（The Domesday Book：公平な地代を得るための国勢調査簿）を、スコットランド王国に導入することでよかった。

また、王妃マーガレット（後の聖マーガレット）は、ケルト式コロバ派教会よりも、ローマ式キリスト教の慈善心に満ちた行いを実践した。

この進言に対し、マルカム3世は、スコットランドの国家組織、経済政策の中に、アングロサクソン系のフェダリズム（封建制度）を、取り入れるようにした。

また、高度な教養を身に付けていたマーガレット（後の聖マーガレット）は、スコットランドに、高度なアングロ=サクソンの生活様式を、取り入れようとした。

当然、ウィリアム1世は、スコットランド人とアングロ=サクソン人の同盟をなすこの結婚に、猛反対した⁹⁷。

この結婚により、マルカム3世は、1070年、イングランド領土のノーサンブリアとカンブリアを攻撃、侵攻し、イングランド北部地方の領土拡大を試みた。その結果、マルカム3世は、ニューキャッスル（Newcastle）からカーライル（Carlisle）までの国境を、確立させることができた。

この1070年に、ウィリアム1世は、1067年に沼沢地上に建てた木造建築の王宮を、敵から防衛するための堅牢な城塞、すなわち石造りの王宮（現在のロンドン塔 the Tower of London）に決定した。

石造建築の王宮が完成する間、ウィリアム1世は、国政を、ウェストミンスター=パレス（Westminster Palace：ウェストミンスター宮殿）で行った。

謀反を起こしていたゴスパトリック伯は、ウィリアム1世征服王から、再度、1072年に伯位の称号を取り消され、ノーサンブリア伯を、デイン人でノーサンブリア伯シアーワード（Siward, Earl of Northumbria, ?- 1055：在位1041-1055）の2男、ノーサンプトンシア（Northamptonshire）、ハンティンドンシア（Huntingdonshire）の伯であったワルテフ（Waltheof, Earl of

Northumbria, ?-1076.5.31 : 在位 1072-1076) に、取って代わられることとなった⁹⁸。

このマルカム3世による1070年の侵攻に対し、逆に反撃のため、1072年、イングランド王ウィリアム1世は、大艦隊の支援のもと、軍隊を引き連れ北上し、スコットランド侵攻を行った。

両者は、パース(Perth)南東のアベルネシー(Abernethy)で対峙した⁹⁹。この対峙は、軍事的規模が大きいウィリアム1世軍の方が優位であった。

そこで、大規模な衝突とはならず、軍事力優位なノルマン軍が、マルカム3世の長男ダンカン(Duncan: その後のダンカン2世 Duncan II of Scotland, c. 1060-1094.11.12 : 在位 1094.5-1094.11) と、義弟エドガー=ジ=アシリングを拘束した。

結果的に、マルカム3世は、ウィリアム1世に敗れ、一方的な和平条約であるアベルネシー条約(Treaty of Abernethy)に同意、締結せざるを得なくなった。

この1072年のアベルネシー条約には、マルカム3世が、ウィリアム1世に対し、封建的主従関係であるオマーージュ(Homage : 封建的主従関係、臣従礼)を執り、かつ皇太子ダンカン、義弟エドガー=ジ=アセリングが人質とされる、ということが含まれていた¹⁰⁰。

すなわち、マルカム3世が、ウィリアム1世に対し、封建的主従関係であるオマーージュ(臣従礼)を執り、服従し、下臣になるということである¹⁰¹。スコットランド王マルカム3世が、イングランド王ウィリアム1世の臣従、下臣になったことが、その後のスコットランド経済史上において、多大なトラブルを生む結果となった。

だが、マルカム3世は、この封建的主従関係であるオマーージュ(Homage : 臣従礼)の意味を理解しなかった。

だが、マルカム3世は、ウィリアム1世がフランスとのトラブルで、多忙を極めていた時を狙って、1079年8月中旬に、またイングランド北部のノーサンブリアを侵攻した¹⁰²。

この1079年の侵攻が、マルカム3世による第3回目のイングランド侵攻である¹⁰³。

だが、この1079年の侵攻に対して、ウィリアム1世の長男ロベール（後のノルマンディー公ロベール2世 Robert II, c. 1054-1134.2.10：ノルマンディー公在位1087-1105）は、報復手段として、反撃し撃退させられた¹⁰⁴。

その8年後の1087年9月9日、ウィリアム1世は、対フランス戦争で、フィリップ1世（Philippe I, 1052.5.23-1108.7.29：在位1060-1108）と戦火を交えている最中、占領したマンテ城に行く途中、落馬して死亡した。その後イングランド王を継承したのは、ウィリアム1世の3男ウィリアム2世（William II：ウィリアム=ルフス（赤顔王）William Rufus, c. 1060-1100.8.2：在位1087-1100）である。

ウィリアム2世が、イングランド王に就いてことにより、マルカム3世は、ウィリアム2世を、封建的上位者にしなければならなくなった。

だが、マルカム3世は、スコットランド王国の独立性を保ちたいために、オマージュ（Homage：臣従礼）を執りたくなく、下臣にもなりたくなかった。

このことは、マルカム3世は、ウィリアム1世が死去したことにより、彼と交わした1072年のアベルネシー条約を無視し、1091年5月、南下し、イングランド北部を攻撃し、ダラム市を包囲した、ことから判明できる。

南下してくるスコットランド軍に対し、イングランド王ウィリアム2世（ウィリアム=ルフスは、ノルマン軍を北部に向かわせた。結果的には、両軍の大規模な衝突が避けられ、1072年のアベルネシー条約の修正と改訂が行われ、改訂アベルネシー条約が、合意された。

だが、マルカム3世は、この1091年の改訂アベルネシー条約を、さらに無視し、1091年11月、スコットランド軍を南下させ、イングランド北部、カーライル（Carlisle）以南のカンブリア（Cambria）地域に侵攻した。

この1091年の侵攻が、マルカム3世による第4回目のイングランド侵攻である¹⁰⁵。

これに対し、イングランド王ウィリアム2世（ウィリアム=ムルフス）は、強力なノルマン軍でもって、スコットランド王マルカム3世支配下のカーライルを徹底的に攻撃、壊滅させ、1092年にカンブリアを占領した¹⁰⁶。

このカンブリア地域の脅威を取り除くために、ウィリアム2世は、1093年に、カーライル城（Carlisle Castle）の建設を始めた。

カーライルを奪取されたことにより、言い換えるとカーライルを取り戻すために、マルカム3世は、1093年、イングランド北部ノーザンバーランドの中心地、アニック（Alnwick）に侵攻した。

そして、1093年のアニックの戦い（the Battle of Alnwick）となった。

この1093年の侵攻が、マルカム3世による第5回目のイングランド侵攻である¹⁰⁷。

この1093年のアニックの戦いで、マルカム3世は、息子のエドワード（Edward）と共に、1093年11月13日に、殺された¹⁰⁸。

これにより、ウィリアム2世（ウィリアム=ムルフス）は、カンブリア地域を占領支配した。

一方、スコットランド王国は、マルカム3世の弟ドンナルド3世（Donald III, 1033-1099：在位 1093-1094.5, 1094.11.1097）によって、引き継がれた。

なお、マルカム3世の王妃マーガレットは、1093年11月16日、死亡した。

王妃マーガレット（後の聖マーガレット）が進言し、マルカム3世が導入しようとしたアングロサクソン系の封建制度は、2人の子供のディヴィッド1世（David I, c. 1018-1153.5.24：在位 1124-1153）が正式に導入した¹⁰⁹。

V. おわりに

父スコウシア王ダンカン1世が従姉のマクベス王に殺され、その報復としてマクベス王を殺し、さらにその後、スコウシア王に就いたマクベスの義理の息子ルーラッハも殺害したマルカム3世は、安定的な王位継承を望むため、タニストリー=システム（Tanistry System：長子継承ではなく、王（族長）在任中、

傍系親族による王（族長）後継者選定制度）を廃止し、長子継承を行うようにした。

王位継承問題が一応解決すると、マルカム3世は、スコットランド王国の治安、領土拡大に乗り出さなければならなかった。

領土拡大のためには、戦争費用が掛かる。戦争費用を捻出するためには、より多くの徴税、地代を課税しなければならない。

経済が疲弊すると、軍事力が低下する。

経済が落ち込むと、軍事力が弱くなる。

経済なくして、財政・戦費なし。

経済あつての財政・戦費あり。

マルカム3世は、スコットランド王国の経済発展、軍事力強化のために、経済基盤をしっかり固めなければならなかった。

経済基盤を固めるため、また少しでもより多くの量を獲得するために、マルカム3世は、イングランド王国に、5回ほど、戦いを挑んだ。

少しでも勝ち戦にするために、当時、最強の海軍力を保持していたデンマーク王スウェイン2世（スウェイン=エストリッドソン）に援護を求めた。

だが、ウィリアム1世のデインゲルト（Danegeld：デイン人に支払うための土地課税：デイン人に出て行ってもらうための立退料）の支払いにより、この援護は、なくなった。

マルカム2世は、イングランド王位継承者最高位のエドガー=ジ=アセリングとの姉マーガレット（後の聖マーガレット）と再婚することにより、イングランド侵攻への口実をつくり、攻撃した。

だが、この侵攻も、イングランド軍の軍事力には叶わなかった。

結果的に、5回ほどのイングランド侵攻も、ことごとく、イングランド軍の軍事力に、打ちのめされ、イングランド王ウィリアム1世に封建的主従関係であるオマージュ（Homage：臣従礼）を誓わされた。

このイングランド王ウィリアム1世へのオマージュが、マルカム3世以降、スコットランド王国では、大問題となり、独立しようとする王国民へのナショナリズムを掻き立てて行ったのである。

¹ スコット族 (the Scots)、キリスト教徒、ダルニアダ王 (King of Dál Riada) で、アルピン王家の創始者アルピン (Alpin. ?-834) が、領土拡大のため、アルバ王国 (Kingdom of Alba)、ピクト族 (the Picts) の領地に侵攻した時、834年に、ピクト族の戦士によって殺害された。

ダルニアダ王国の王位は、839年、母がピクト族王家の出身であるケニス=マッカルピン (Kenneth MacAlpin, 810-858.2.13 : 在位ダルニアダ王 839-858、アルバ王国 843-858) が、継承した。

また、843年に、ケニス=マッカルピンが、アルバ王国を吸収合併し、アルバ連合王国の王位に就いた。アルバ王ケニス1世 (Kenneth I, 810-858.2.13 : 在位 843-858) が誕生したのである。その後、アルピン王家は、マルカム3世まで、続いたのである。

少数のスコット族がヒルベニア (HIBERNIA : 現アイルランド) から、カレドニア (CALEDONIA : 現スコットランド) に、宗教上の対立から逃れ、小さなダルニアダ王国創設した時、カレドニアでは、すでにピクト族がアルバ王国を形成した。その少数のスコット族が大多数のピクト族をカレドニア北東部に追いやった。人口的にも、領土的にも、圧倒的優位的に勝っているピクト族が、スコット族に吸収合併されたのであろうか。両民族が衝突した時、順調にいけば、人工的に圧倒的に多いピクト族が勝利し、ピクト族の王がアルバ連合王国の王位に就くのではなかろうか。史実は、843年に、スコット族の王ケニス1世が、アルバ連合王国の王、すなわちアルバ王に就いた。ピクト族の相続に関する慣習は、古代から母系継承である。このことから考えると、母がピクト族王家の出身であるケニス=マッカルピンが継承したのは、分からなくもない。

² 著者 (=川瀬) が所有する史料の中にマルカム2世の長女をベソック (Bethoc, 984-1045)、2女をドーナダ (Donada, c. 985-1034.11.25) とする史料 (Josephine Ross, *Kings & Queens of Britain*, Reprinted of 1982, edition, Artus Books, 1994, p. 188.) をもとにした。だが、3女の名前を記載した史料を持ち合わせていない。そこで、マルカム2世の3女を、オークニー伯シーガードの妻にした。

・ Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, Goblinshead: Musselburgh, 2003, p. 8.

・ Blair Millar, *A Pocket History of Scotland*, Gill Books, 2013, p. 46.

・ Hall Simon (Intro.), *The Hutchison Illustrated Encyclopedia of British History*, Helicon Publishing, 1995, p. 110.

³ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, Reprinted of 1975, edition, Oliver & Boyd, 1975, p. 98.

⁴ James Mackay, *Pocket General Editor, Scottish History: story of a nation*, Lomond Books, 2014, p. 78.

⁵ Rosalind Mitchison, *A History of Scotland*, Second Edition, Reprinted of 1970, edition, Methuen: London and New York, 1982, p.13.

⁶ ・Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, Reprinted of 1903, edition, AMS Press, 1970, p. 52.

・Mike Ashley, *A Brief History of British Kings & Queens*, Reprinted of 1998, edition, Running Press Books Publishers, 2002, p. 103.

⁷ マルカム3世のニックネームに、彼の身体特徴として、マルカム=カンモア (Malcolm Cammore)、すなわち大頭 (Bighead) と言われる書物がある。だが、その大頭という意味には、強いリーダーシップを発揮できる男、すなわち偉大な族長 ('the Great Chief') と解釈できる。そこで、著者 (=川瀬) は、マルカム3世を、アルバ王国、スコウシア王国、すなわちスコットランド王国を、統一させ、果敢に大国イングランド王国に、戦いを挑んだ国王として、偉大な族長とした。

・Mike Ashley, *A Brief History of British Kings & Queens*, op. cit., p. 110.

・Neil Oliver, *A History of Scotland, Reprinted of 2009*, edition, Weidenfeld & Nicolson, 2010, p. 72.

⁸ Nigel Tranter, *The Story of Scotland*, Reprinted of 1987, edition, Neil Wilson Publishing · Glasgow, 2012, p. 12.

⁹ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, op. cit., p. 98.

¹⁰ Nigel Tranter, *The Story of Scotland*, op. cit., p. 15.

¹¹ ・Collins Gem, *Kings and Queens*, Reprinted of 1996, edition, Neil Grant, 2004, p. 26.

・Charles Sinclair, *A Wee Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, op. cit., p. 8.

¹² Cf. David Ross, *Scotland: History of Nation*, New Edition, Reprinted of 1999, edition, Lomond Books, 2014, p. 54.

¹³ Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, op. cit., p. 53.

・George Buchanan, *The History of Scotland*, Translated From the Latin, Vol.1, Reprinted of 1827, edition, Forgotten Books, 2017, p. 322.

¹⁴ Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, op. cit., p. 11.

¹⁵ ・Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, Anglo-Saxon England, c. 550-1087, Third Edition, Reprinted of 1971, edition, Oxford: At the Clarendon Press, 2000, pp. 392-393.

・Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, The History of England: from the Earliest Time to the Norman Conquest, to 1066, in William Hunt and Reginald L. Poole editors, Reprinted of 1914, edition, AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, p. 94 and p. 397.

¹⁶ ・Mike Ashley, *A Brief History of British Kings & Queens*, op. cit., p. 39.

・Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, op. cit., p. 13.

¹⁷ ・Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, op. cit., p. 397.

・George Buchanan, *The History of Scotland*, op. cit., p. 339.

・Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, op. cit., p. 13.

¹⁸ エドワード=アシリグ (エドワード=ジ=エグザイル) とアガサの長女マーガレットの誕生が、1045年という史料があるが、マーガレットが誕生した地は、ハンガリーであ

るので、ハンガリー亡命後以降に生まれたことでなければならない。そこで、キエフからハンガリーに亡命したのが、1046年なので、マーガレットが誕生したのを、1046年とした。

・ Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 13.

1⁹ ・ Cf. James Mackay, *Pocket General Editor, Scottish History: story of a nation*, *op. cit.*, p. 84.

・ Cf. Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 20.

2⁰ David Ross, *Scotland: History of Nation*, New Edition, Reprinted of 1999, edition, Lomond Books, 2014, p. 294.

2¹ ・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 93.

・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 94 and p. 341.

・ Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 359.

2² アルバ王ケネス2世は、ウェセックス出身イングランド王エドガー1世 (Edgar I of Wessex : エドガー平和王 Edgar the Peaceful, 944-975.7.8 : ノーサンブリア、マーシア、ウェセックス王在位 957-975.7.8 : イングランド王在位 959.10.1-975.7.8) 領有のノーサンブリア (Northumbria) に、971年頃、侵攻した。その際、ケネス2世は、ノーサンブリアの1部、穀倉地帯のロシアン (Lothian) を、エドガー1世より、譲渡された。その後のロシアンは、1003年に、デイン人 (the Danes) により略奪された。だが、旧バーニシア王国の首都であるバンボロー (Bamburgh) と同様、ロシアンも、半独立を保っていた。

・ David Ross, *Scotland: History of Nation*, New Edition, Reprinted of 1999, edition, Lomond Books, 2014, p. 54.

2³ David Ross, *Scotland: History of Nation*, *ibid.* p. 54 and p. 971.

2⁴ Michael Lynch, *Scotland: A New History*, Century, 1991, p. 46.

2⁵ ・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 409.

・ Nigel Tranter, *The Story of Scotland*, *op. cit.*, p. 13.

2⁶ ・ James Mackay, *Pocket General Editor, Scottish History: story of a nation*, *op. cit.*, p. 78.

・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 99.

2⁷ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, *ibid.*, p. 99.

2⁸ Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 11.

2⁹ ・ Nigel Tranter, *The Story of Scotland*, *op. cit.*, p. 16.

・ Mike Ashley, *A Brief History of British Kings & Queens*, *op. cit.*, p. 108.

3⁰ ・ Neil Oliver, *A History of Scotland*, *op. cit.*, p. 72.

・ Blair Millar, *A Pocket History of Scotland*, Gill Books, 2013, p. 47.

・ Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 11.

・ Chris Tabraham, *The History of Scotland*, Reprinted of 2010, edition, Colin Baxter, 2016, p. 55.

3¹ サクソン王エセルレッド2世 (Ethelred II, 978-1016) とノルマンディー公リシャール2世の娘エマ (Emma d. 1052) との間に生まれたエドワード (Edward)。このエドワードが、1042年からイングランド王に就いた (母の再婚相手クヌート1世治世時には、クヌートを嫌い母の故郷ノルマンディーに滞在していた)。イングランド王に就いたエドワードは、ウェストミンスター=アベイ (Westminster Abbey) を再建するほど敬虔なカトリック教徒であった。そこで、エドワードを、後世の経済史家が名付けたニックネームで、the Confessor を、懺悔王と称している和書もある。だが、この the Confessor は、証聖王と訳さなければならない。というのは、敬虔なカトリック教徒であったからである。

3² Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 11.

3³ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 354, and p. 446.

3⁴ Michael Lynch, *Scotland: A New History*, *op. cit.*, p. 50.

3⁵ Michael Lynch, *Scotland: A New History*, *ibid.*, p. 50.

3⁶ Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 11.

3⁷ Christopher Brooke, *The Saxon and Norman Kings*, Third Edition, Reprinted of 1963, edition, Blackwell: Classic Histories of England, 2001, p. 28.

・Michael St John Parker, *William the Conqueror and the Battle of Hastings*, Pitkin Pictorials, 1996, p. 4.

3⁸ ・Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 54.

・Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 14.

・Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 463.

3⁹ Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 17.

4⁰ Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 571.

4¹ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 461.

4² Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 20.

4³ ・David Ross, *Scotland: History of Nation*, *op. cit.*, p. 56.

・Michael Lynch, *Scotland: A New History*, *op. cit.*, p. 50.

4⁴ Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 15.

4⁵ ・David Ross, *Scotland: History of Nation*, *op. cit.*, p. 56.

・Michael Lynch, *Scotland: A New History*, *op. cit.*, 1991, p. 74.

・Collins Gem, *Kings and Queens*, Reprinted of 1996, edition, Neil Grant, 2004, p. 27.

4⁶ ・Mike Ashley, *A Brief History of British Kings & Queens*, *op. cit.*, p. 110.

・Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 89.

4⁷ ・著者 (=川瀬) の史料の中には、マルカム3世 (1031.3.16-1093.11.13) の最初の王妃が、オークニー伯トルフィン=シングルッソン (1009-1058) の未亡人であったイーンガボーグ (1030-1067) である、という洋書もある。確かに、史実では、マルカム3世の最初の王妃は、イーンガボーグである。また、マルカム3世が最初に結婚した年は、1059年である。イーンガボーグが未亡人だとすると、オークニー伯トルフィン=シングルッソン (1009-1058) は、1059年までに、死んでいなければならない。当然史実は、正し

いのであるが、年齢的な経緯から考えると、マルカム3世の最初の王妃は、トルフィン=シングルソン伯(1009-1058)の娘イーングボーク(1030-1067)とした方が、ヨリ史実を、的確に表していると思われる。そのことを証明する史料として、下記の史料の中に、マルカム3世の最初の王妃は、トルフィン=シングルソン伯(1009-1058)の娘イーングボーク(1030-1067)であると記述されている箇所がある。

- ・ Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 17.
- ・ James Mackay, *Pocket General Editor, Scottish History: story of a nation*, *op. cit.*, p. 81.
- ・ Nigel Tranter, *The Story of Scotland*, *op. cit.*, p. 19.
- ・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 100.
- ・ John L. Roberts, *Lost Kings: Celtic Scotland and the Middle Ages*, Edinburgh University Press, 1997, p. 68.
- ⁴⁸ ・ Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 90.
- ・ James Mackay, *Pocket General Editor, Scottish History: story of a nation*, *op. cit.*, p. 82.
- ⁴⁹ Michael Lynch, *Scotland: A New History*, *op. cit.*, 1991, p. 74.
- ⁵⁰ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 468.
- ⁵¹ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 469.
- ⁵² ・ Christopher Brooke, *The Saxon and Norman Kings*, *op. cit.*, p. 28.
- ・ Michael St John Parker, *William the Conqueror and the Battle of Hastings*, *op. cit.*, p. 4.
- ⁵³ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 472.
- ⁵⁴ ・ Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, pp. 590-591.
- ・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, pp. 481-482.
- ⁵⁵ Nicholas Hooper & Matthew, *Cambridge Illustrated Atlas Warfare, The Middle Ages 768-1487*, Cambridge University press, 1996, pp.42-43.
- ⁵⁶ Christopher Gravett, *Hastings 1066: The Fall of Saxon England*, Campaign 13, Osprey Military, 1992, p. 53.
- ⁵⁷ Geoff Hutchinson, *The Battle of Hastings 1066: A Brief history*, M & W Morgan, 1998, pp. 6-7.
- ⁵⁸ ・ Mike Ashley, *A Brief History of British Kings & Queens*, *op. cit.*, p. 50.
- ・ Christopher Gravett, *Hastings 1066*, *op. cit.*, p. 77.
- ⁵⁹ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, pp. 487-488.
- ⁶⁰ ・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *ibid.*, p. 490.
- ・ Geoff Hutchinson, *The Battle of Hastings 1066*, *op. cit.*, p. 11,
- ・ Christopher Gravett, *Hastings 1066*, *op. cit.*, p. 80.
- ⁶¹ ・ Geoff Hutchinson, *The Battle of Hastings 1066*, *op. cit.*, p. 11,
- ・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 490.
- ⁶² Christopher Gravett, *Hastings 1066*, *op. cit.*, p. 83.

-
- 6³ Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 596.
- 6⁴ Christopher Gravett, *Hastings 1066*, *op. cit.*, pp. 81-83.
- 6⁵ Christopher Gravett, *Hastings 1066*, *ibid.*, p. 83.
- 6⁶ ・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, From the Norman Conquest to the Death of John (1066-1216), in William Hunt and Reginald L. Poole editors, Reprinted of 1905, edition, AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, p. 94 and p. 6.
- ・Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 596.
- 6⁷ Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 596.
- 6⁸ Christopher Gravett, *Hastings 1066*, *op. cit.*, p. 83.
- 6⁹ Christopher Gravett, *Hastings 1066*, *ibid.*, p. 82.
- 7⁰ ・Nicholas Hooper & Matthew, *Cambridge Illustrated Atlas Warfare, The Middle Ages 768-1487*, *op. cit.*, p. 46.
- ・Christopher Gravett, *Hastings 1066*, *op. cit.*, p. 82.
- 7¹ ・Eileen Dunlop, *Queen Margaret of Scotland*, Reprinted of 2005, edition, national Museums Scotland, 2011, p. 36.
- ・A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 118.
- ・Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 601.
- 7² A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 118.
- 7³ エドガー=ジ=アシリング一家が、1068年夏、ロンドン近郊からテムズ川に向かった最終の居住地は、ウィリアム1世の宮廷（Court）とした。というのは、エドガー=ジ=アシリング一家が、ウィリアム1世の城内の狩猟用屋敷（Royal Hunting Lodge）、あるいは他の場所に移動させられたという史料が、見当たらなかったからである。そこで、軟禁状態での最初の居住地から、何ら移動させられていなかったことを鑑みて、最初の居住地を、宮廷（Court）とした。
- ・Eileen Dunlop, *Queen Margaret of Scotland*, Reprinted of 2005, edition, national Museums Scotland, 2011, p. 36.
- ・A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 118.
- ・Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 601.
- 7⁴ Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 604.
- 7⁵ ・Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 90.
- ・Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 21.
- 7⁶ Christopher Gravett, *Hastings 1066*, *op. cit.*, p. 92.
- 7⁷ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 29.
- 7⁸ ・Eileen Dunlop, *Queen Margaret of Scotland*, *op. cit.*, pp. 35-36.
- ・Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 604.
- 7⁹ ・Eileen Dunlop, *Queen Margaret of Scotland*, *op. cit.*, p. 36.

-
- ・ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 31.
- ⁸⁰ Michael Lynch, *Scotland: A New History*, *op. cit.*, 1991, p. 74.
- ⁸¹ ・ Christopher Gravett, *Hastings 1066*, *op. cit.*, p. 92.
- ・ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, pp. 32-33.
- ⁸² ・ George Buchanan, *The History of Scotland*, Translated From the Latin, Vol.1, *op. cit.*, p. 340.
- ・ Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 601.
- ・ Eileen Dunlop, *Queen Margaret of Scotland*, *op. cit.*, p. 36.
- ・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 118.
- ⁸³ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 32.
- ⁸⁴ Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, pp. 601-602.
- ⁸⁵ ・ Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 19.
- ・ Eileen Dunlop, *Queen Margaret of Scotland*, *op. cit.*, p. 36.
- ・ 現在、ノースクイーンズフェリー (North Queensferry) の上空に、フォース=レイル
エェイ=ブリッジ (Forth Railway Bridge) が通っている。なお、その西側にフォース=
ロード=ブリッジ (Forth Road Bridge : A9000)、クイーンズフェリー=クロッシング
(Queensferry Crossing Bridge : M90) が、建造されている。
- ⁸⁶ Eileen Dunlop, *Queen Margaret of Scotland*, *op. cit.*, pp. 36-37.
- ⁸⁷ Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 20.
- ⁸⁸ ・ Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 602.
- ・ Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 91.
- ・ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 34.
- ⁸⁹ Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, pp. 21-22.
- ⁹⁰ M. リンチ氏によると、第2回目のイングランド侵攻を、1070年 (Michael Lynch, *Scotland: A New History*, *op. cit.*, 1991, p. 74.) としているが、下記の史料に基づき、1069年とした。
- ・ Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 601.
- ・ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 35.
- ⁹¹ ・ Christopher Gravett, *Hastings 1066*, *op. cit.*, p. 93.
- ・ Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 602.
- ・ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 31.
- ⁹² Christopher Gravett, *Hastings 1066*, *op. cit.*, p. 93.
- ⁹³ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 37.
- ⁹⁴ Christopher Gravett, *Hastings 1066*, *op. cit.*, p. 93.
- ⁹⁵ ・ Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 21.
- ・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 119.
- ⁹⁶ Eileen Dunlop, *Queen Margaret of Scotland*, *op. cit.*, p. iv.

-
- ⁹⁷ Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 21.
- ⁹⁸ Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 92.
- ⁹⁹ ・David Ross, *Scotland: History of Nation*, *op. cit.*, p. 57.
・James Mackay, *Pocket General Editor, Scottish History: story of a nation*, *op. cit.*, p. 83.
- Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 23.
- ¹⁰⁰ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 119.
- ¹⁰¹ ・Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 91.
・James Mackay, *Pocket General Editor, Scottish History, story of a nation*, *op. cit.*, p. 83.
- ¹⁰² Charles Sinclair, *A Guide to St Margaret and Malcolm Canmore*, *op. cit.*, p. 24.
- ¹⁰³ Michael Lynch, *Scotland: A New History*, *op. cit.*, 1991, p. 74.
- ¹⁰⁴ ・David Ross, *Scotland: History of Nation*, *op. cit.*, p. 57.
・James Mackay, *Pocket General Editor, Scottish History, story of a nation*, *op. cit.*, p. 83.
- ¹⁰⁵ Michael Lynch, *Scotland: A New History*, *op. cit.*, 1991, p. 74.
- ¹⁰⁶ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 89.
- ¹⁰⁷ Michael Lynch, *Scotland: A New History*, *op. cit.*, 1991, p. 74.
- ¹⁰⁸ ・David Ross, *Scotland: History of Nation*, *op. cit.*, p. 57.
・Mike Ashley, *A Brief History of British Kings & Queens*, *op. cit.*, p. 110.
- ¹⁰⁹ James Mackay, *Pocket General Editor, Scottish History, story of a nation*, *op. cit.*, p. 93.